

が縦状に互層堆積する。II-2-①層は褐色砂質土層で、径5mmまでの礫が多く混じる。シルト質土が少量混じり、しまりは弱い。II-2-②層は褐色砂質土層で、砂や径1~3mmの礫が少量化じり、シルトや微細砂がラミナとなってみられる。II-2-③層の水田層に伴う溝の埋土と考えられる。同じ堆積は、南壁でも認められた。II-2-④層は、褐色砂質シルト層。径5mmまでの礫が少量混じる。部分的に微細砂をラミナとして含む。しまりがあり、上面の凹凸が顕著である。II-2-⑤層は、オリーブ褐色砂質シルト層で、径2mm以下の小礫が少し混じり、微細砂のラミナがみられる。上部に鉄分の沈着層が形成されている。土質はしまり、粘性をおびる。II-2-⑥層はオリーブ褐色シルト層で、径3mm前後の礫が少し混じる。部分的にシルトや微細砂のラミナもみられるが、しまりと粘性がある。II-2-⑦層は黄褐色砂層で、径2mm以下の小礫が少量混じる。シルトや細砂のラミナが発達する。上部に斑状に鉄分が沈着し、下部はややシルト質を増す。II-2-⑧層はオリーブ褐色シルト土層。径2mm前後の小礫が少量混じる。上面には鉄分、層中にはマンガンの沈着があり、しまりがある。

SR-1は、①~③層から構成される。SR-1-①層は暗灰黄色シルト層で、径5mmまでの礫がやや多く混じり、シルトや微細砂のラミナがみられる。マンガンの沈着があり、土質はしまる。SR-1-②層は、にぶい黄色細砂層で、シルトのラミナが発達する。SR-1-③層は褐色砂礫層で、径0.5~30mmの亜角礫からなる。しまりは弱い。

### 3 調査の成果

城北団地北半部では、これまでの調査成果から東から西に向かってのびる3条の埋没旧河道があることが明らかにされている。文京遺跡18次調査A区は3条の旧河道の合流部、共通教育管理棟周辺はもっとも南側の旧河道にあたる。文京遺跡18次調査A区の旧河道SR-400では、縄文時代~古代の大量の遺物が出土している。今回の調査で確認されたSR-1も、一連の旧河道であり、当該期の遺物が含まれていると判断できる。

以上の旧河道は、流水がなくなると、周囲からシルトなどが流れ込み谷状の窪地となり、古代後半~中世前期の水田が開田される。今回の共通教育管理棟周辺の試掘調査でも、旧河道SR-1の上層に、水田層と洪

水層が互層堆積していることを確認できた。調査範囲が狭いこともあり遺物はほとんど出土していないが、そうした水田層と洪水層の互層堆積の下半部にあたるII-2層とした水田層は、18次調査A区の古代後半~中世前期の水田層と層位関係と土質が共通する。II-2層の水田層は、古代後半まで遡る可能性が高い。

加えて、共通教育管理棟北東部にあたる6トレンチ東端では、東北に向かって落ち込むIV層が検出された。縄文後期の深鉢が出土し、とくにIV-④層は土壤化し攪拌された痕跡を残す。土壤化層が攪拌されているので、周辺のIV層には縄文後期の何らかの遺構が含まれている可能性が高い。採取した土壤試料のアント・オパール分析結果もあわせて検討する必要がある。

以上、共通教育管理棟北半部周辺には、東から西に向かって流れる旧河道が埋積され、縄文時代~古代の遺物が出土すると考えられる。また、旧河道が埋没した後には、古代後半まで遡る可能性が高い水田が営まれている。そして、共通教育管理棟北東部周辺のIV層には、縄文後期の遺物が含まれ、遺構も営まれている可能性が高い。

以上の調査結果から、今回の共通教育管理棟の耐震改修その他の工事においては、以下のような埋蔵文化財への影響が生じるものと判断できる。

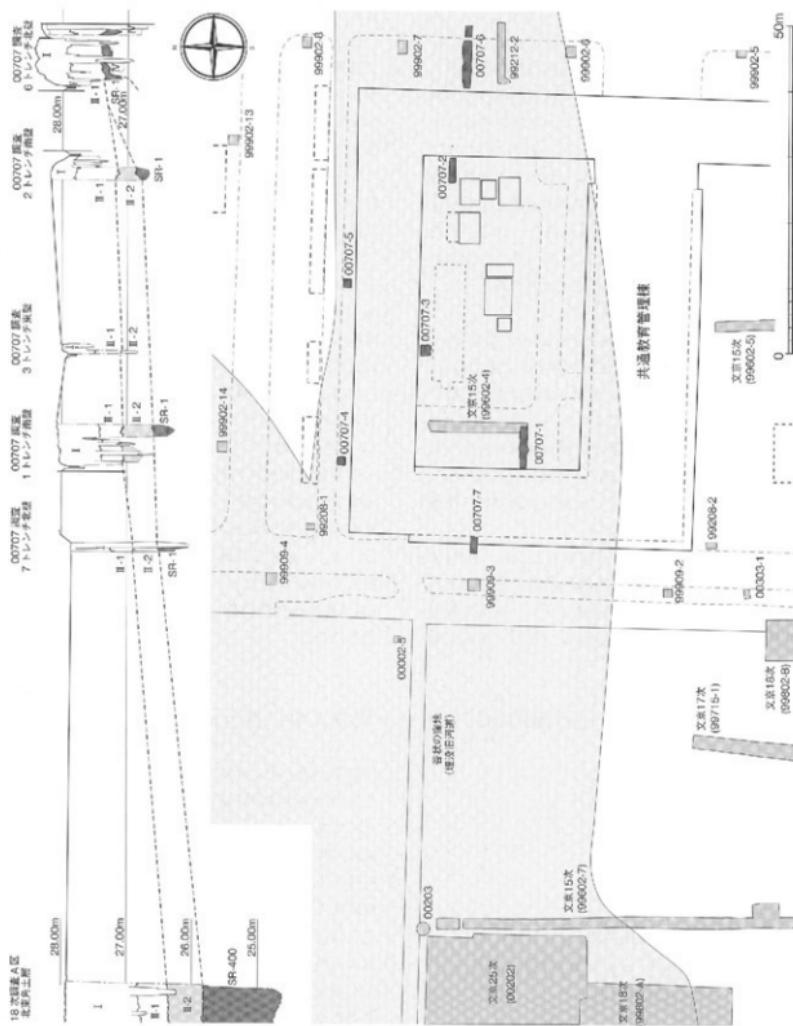
#### (1) 西棟周辺

外壁から約2.9m、深さ175cmを掘削する耐震補強基礎設置工事が計画されている。7トレンチの調査では、余掘り範囲は建物外壁から1.5mまでと確認でき、道路面から85cm以下にII-2層とSR-1が良好な状況で残っている。工事に伴う掘削深度は175cmまであり、II-2層とSR-1が破壊されることになる。

#### (2) 北棟周辺

北棟北側では、外壁から2.4m、深さ100cmまでを掘削して耐震補強基礎を設置する計画である。4・5トレンチの調査成果から、余掘り範囲は建物外壁から0.65mと推定され、道路側縁石の上面から85cmでII-2層があらわれる。したがって、外壁から2.4m、深さ100cmまでの掘削計画では、埋蔵文化財が破壊されることになる。

北棟南側では、外壁から2.55m、深さ100cmまでを掘削して耐震補強基礎を設置する計画である。2トレンチの調査成果から、余掘り範囲は建物外壁から0.7mと推定される。また、縁石上面から75cmでII-2層があらわれる。したがって、外壁から2.55m、深さ



100cmまでの掘削計画では、埋蔵文化財が破壊されることになる。

一方、北棟北東角部では、外壁から2.0m、深さ150cmまでを掘削して増築工事が計画されている。5・6トレンチの調査成果から、余掘り範囲は建物外壁から0.75mと推定できる。5トレンチでは道路縁石の上面から85cmでII-2層、6トレンチでは建物側溝縁石の上面から55cmでSR-1があらわれる。また、周辺では、99902調査8トレンチの調査成果もあわせ、建物側溝縁石の上面から70cmほどで縄文後期の遺構と遺物が包含されている可能性が高いIV層があらわれる。したがって、建物外壁から2.0m、深さ150cmまでの掘削計画では、埋蔵文化財が破壊されることとなる。

#### (3) 東棟周辺

東棟北半部の東側では、外壁から2.4m、深さ100cmまでを掘削して耐震補強基礎を設置する計画である。6トレンチの調査成果から、余掘り範囲は建物外壁から0.75mと推定でき、建物側溝縁石の上面から55cmでSR-1、70cmほどで縄文後期の遺構と遺物が包含されている可能性が高いIV層があらわれる。したがって、外壁から2.4m、深さ100cmまでの掘削計画では、埋蔵文化財が破壊されることになる。

東棟北半部の西側では、外壁から2.55m、深さ100cmまでを掘削して耐震補強基礎を設置する計画である。しかし、3トレンチの調査成果から、余掘り範囲は建物外壁から0.7mと推定される。また、縁石上面

から75cmでII-2層があらわれる。したがって、外壁から2.55m、深さ100cmまでの掘削計画では、埋蔵文化財が破壊されることになる。

また、東棟北半部では、中庭側と東側へ向かうスロープ設置工事が計画されている。これに伴う掘削は、外壁から約6.5m、深さ50cmである。2・6トレンチの調査成果から、余掘り範囲は建物外壁から75cmほどと推定できる。また、建物側溝縁石の上面から55~75cmでII-2層があらわれる。掘削深度を埋蔵文化財へ影響を生じない55cmまでとするよう工事計画の再協議を依頼した。

そして、東棟東側から共同溝まで、2ヶ所の電気配管、排水管、給水管の新設工事が計画され、70~200cmの掘削が予定されている。6トレンチでは、建物側溝縁石の上面から55cmでSR-1、70cmほどで縄文後期の遺構と遺物が包含されている可能性が高いIV層があらわれるので、工事によって埋蔵文化財が破壊されるものと判断する。

#### (4) 中庭西部

渡り廊下増築のため、外壁から約12.5m、深さ130cmまでの掘削が計画されている。1トレンチの調査成果から、余掘り範囲は建物外壁から0.75mと推定される。また、建物側溝縁石の上面から80cmでII-2層があらわれる。したがって、外壁から約12.5m、深さ130cmまでの掘削計画では、埋蔵文化財が破壊されることになる。

(田崎・吉田・三吉)

## 00708 弓道場的場防矢ネット取設工事に伴う試掘調査

調査地点 松山市文京町3番  
愛媛大学城北団地  
調査面積 13.2m<sup>2</sup>  
調査期間 2007年6月12・13日  
調査種別 立会調査  
調査担当 吉田広・三吉秀充  
調査補助 宮崎直栄・濱田美加  
依頼文書 学生支援部学生支援部長発事務連絡  
(平成19年4月20日付)

#### 1 調査にいたる経緯

平成18年以来、城北事業場安全衛生委員会において、弓道場の安全管理の問題がたびたび指摘されていた。

弓道場的場の南北両側に隙間があり、射場から放たれた矢が的場南側の駐輪場へ打ち込まれる可能性があるためである。城北事業場安全衛生委員会の指摘を受け、施設基盤部安全衛生管理室では、弓道場及び弓道部を所管する教育学生支援部学生生活課へ、安全管理体制の確立と事故防止の徹底を依頼した。これに基づき学生支援部では、防矢ネットの新設を計画し、施設基盤部に工事計画の立案を依頼した。施設基盤部では、掘削工事を伴うことから調査室に連絡をとり、埋蔵文化財調査室と、工事計画と埋蔵文化財保護について協議を行うことになった。

提示された工事計画では、径30cm弱の防矢ネット支柱4本設置のためオーガ掘削を行い、かつ現地表下37

cmに長さ1mの根かせを埋わせるものである。径30cm弱とは言え、オーガによる掘削はその径を超え、しかもオーガ掘削前に地下支障物不在確認の掘削を伴う。工事地点に最も近接する98806調査区では、現地表下65cmで城北団地基本層序のⅢ層が出土しており、東側の文京遺跡10次調査区（調査番号：98801）や16次調査A区（調査番号：99701）などは、濃密な埋蔵文化財が確認されている。

こうした周辺の調査成果から、工事によって埋蔵文化財に影響が及ぶことがほぼ確実であり、埋蔵文化財調査室は事前に調査を実施する必要を説明した。しかし、工法上、オーガ掘削部分のみの調査は不可能であり、逆に支柱を上回る範囲をすべて調査により掘り下げるることは、支柱設置時の強度を確保できないことになる。そこで、根かせ設置に必要な支柱部分を中心とした約1m四方4ヶ所について、現地表下約65cmで出土する城北団地基本層序のⅢ層までの調査を実施することとした。

## 2 調査の記録

調査地点は3ヶ所である。当初4ヶ所と予定していたが、東側の2ヶ所は、近接して一連の調査区となつた。調査順に1～3トレーナーとした（図29）。

### （1）1トレーナー（図30-①、写真69～73）

1トレーナーは、西側防欠ネットの的場外壁にほぼ接する位置に支柱を設置するために設定した調査区である。弓道場の場の西、建物に接する南北130cm、東西幅85cmのトレーナーである。

トレーナー東側は、弓道場の場建物外壁から西へ50cmまで建物建設時の余掘りによって擾乱を受けており、基本層序Ⅲ層などはすでに破壊されていた。しかし、それ以西では、現地表下28cmでⅡ層、50cmでは自然流路SR-6、60cmでは基本層序Ⅲ層に類似した埋土をもつSC-5が出土した。

SR-6は径1～3mmの砂礫が主体で、褐色の砂質土のブロックを含んでおり、Ⅱ層との区別が難しかったため、西壁上層での確認にとどまる。出土遺物はなく、時期は不明である。

SC-5は、埋土上面で精査を行い、上部からの掘り込みが見られないことを確認した後、手作業で掘り進めた。埋土は暗褐色砂質土で、明黄褐色砂質土の丸いブロックが少量混じる。砂礫は含まない。SP-2は西壁に沿って出土した径30cm強の円形柱穴、深さは8cmである。埋土は暗褐色砂質土で砂礫は混じらない。SP-4に切られる。SP-3は西壁に沿って出土した径14cmの円形柱穴。深さは7cmである。埋土は暗褐色砂質土で、明黄褐色砂質土の丸いブロックを少量含んでいる。SP-4は径28cmの円形の掘り形で、約半分が擾乱で破壊されていた。深さは9cmである。埋土は2層に細分できる。①層は暗褐色砂質土で、明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックを含み、砂礫は含まない。②層は暗褐色砂質土で、砂礫は含まない。①層は柱穴掘り形中央で径10cm

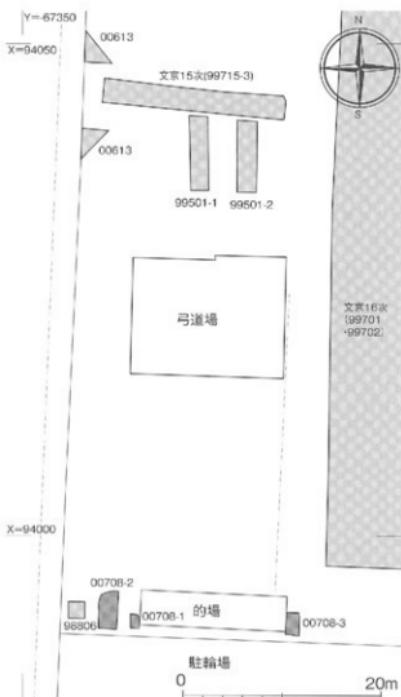


図29 00708調査地点位置図（縮尺1/500）

SP-1は径14cm、深さ4cmの円形柱穴である。埋土は暗褐色砂質土で、明黄褐色砂質土の丸いブロックが少量混じる。砂礫は含まない。SP-2は西壁に沿って出土した径30cm強の円形柱穴、深さは8cmである。埋土は暗褐色砂質土で砂礫は混じらない。SP-4に切られる。SP-3は西壁に沿って出土した径14cmの円形柱穴。深さは7cmである。埋土は暗褐色砂質土で、明黄褐色砂質土の丸いブロックを少量含んでいる。SP-4は径28cmの円形の掘り形で、約半分が擾乱で破壊されていた。深さは9cmである。埋土は2層に細分できる。①層は暗褐色砂質土で、明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックを含み、砂礫は含まない。②層は暗褐色砂質土で、砂礫は含まない。①層は柱穴掘り形中央で径10cm

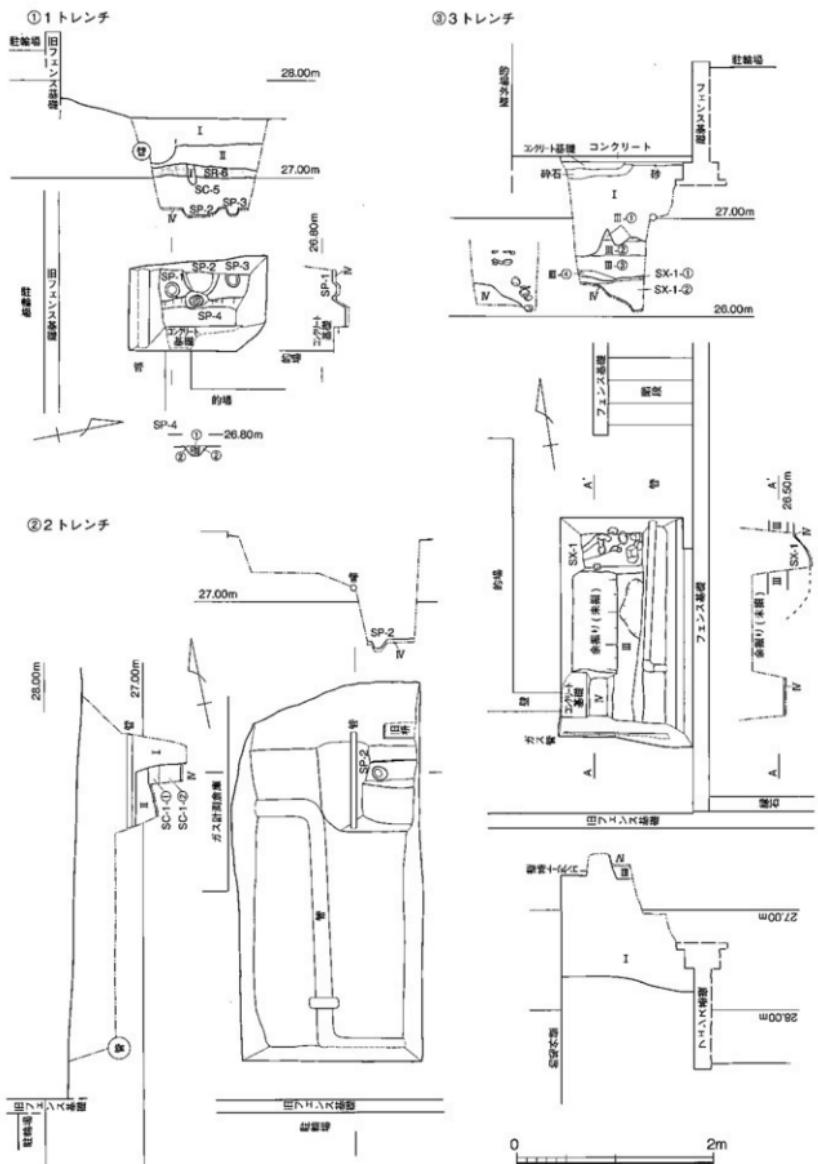


図30 00708調査1～3トレンチ平面図・土層断面図（縮尺 1/50）



写真69 00708調査1・2 トレンチ遠景（南東から）

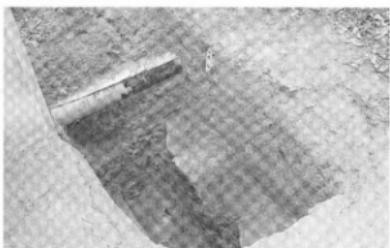


写真70 00708調査1 トレンチⅢ層検出状況（北から）

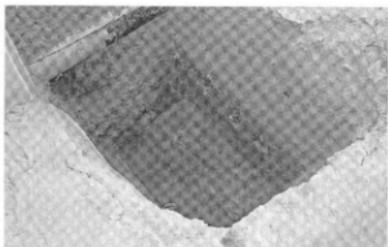


写真71 00708調査1 トレンチSC-5床面（北東から）

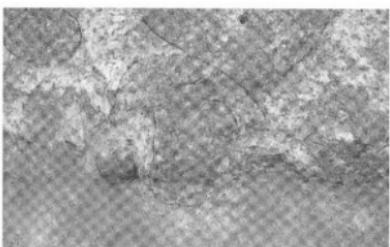


写真72 00708調査1 トレンチSP-4（東から）

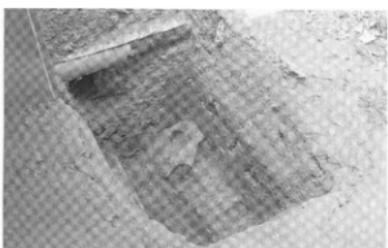


写真73 00708調査1 トレンチ完掘状況（北東から）



写真74 00708調査2 トレンチ全景（北東から）



写真75 00708調査2 トレンチⅢ層検出状況（南西から）

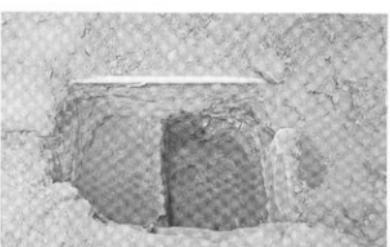


写真76 00708調査2 トレンチ完掘状況（東から）

を調り、柱の抜き取り痕である。

SC-5 の埋土からは、弥生土器片や石器片などが多数出土している。遺物は、人工層位で上部、下部、最下部として層に区分しながら取り上げを行った。上部、最下部では、弥生土器片が各 2 点ずつ出土している。小片であり、詳細な時期比定は難しい。下部からは、安山岩質の石片 1 点、弥生土器の小片から細片が約 20 点出土している。弥生後期前葉の「く」字形口縁の壺の破片や、上げ底のミニチュア壺の底部破片がある。SC-5 は弥生後期前葉の竪穴式住居跡と考えられる。

SC-5 の下層、現地表下 107cm で、トレンチ全面において IV 層を確認し、この面で IV 層に遺物が包含しないことを確認して、調査を終了した。

## (2) 2 トレンチ (図30-②、写真74~76)

2 トレンチは、防矢ネットの西側支柱を設置するための地点で、1 トレンチから 3.5m 離れる。当初南側のバイク駐輪場近くでの約 1m 四方の掘り下げを予定していたが、現地表下約 40cm でガス管が出土したため、掘り下げを一端停止し、ガス管の続きを確認して、支柱設置地点を再検討する必要が生じた。そのため、2 トレンチは南北 3.85m、東西 1.85m の範囲となった。また、北東部に支障物がないことを確認し、支柱設置に必要な範囲のみをさらに深掘りすることとした。深掘り範囲は、南北 1.2m、東西 1.05m である。

深掘り内北側は、橋設置に伴う搅乱により III 層がすでに破壊されており、南側は、現地表下 53cm で II 層、67cm で SC-1 が出土した。

II 層は径 1 ~ 3mm の砂礫が主体で、褐色の砂質土が混じる。層上部は鉄分・マンガンの沈着層がみられる。

SC-1 は、トレンチ南側全面に広がっているが、支柱設置工事に伴う工事で破壊される北部のみ調査を行った。埋土は約 36cm の厚さを測る。①層と②層に細分ができる。①層は暗褐色砂質シルトで、径 1mm 前後の砂粒が少量混じる。②層は暗褐色砂質シルトで、明黄褐色砂質土の丸いブロックをごく少量含む。現地表下約 100cm で床面を検出し、SP-2 を検出できた。SP-2 は径 13cm の円形掘り形で深さは 8cm を測る。埋土は暗褐色砂質シルトで、柱痕などは確認できなかった。SC-1 埋土から 5 点の弥生土器の小片が出土し、弥生中期後葉～後期前葉に比定できる鉢の口縁部が含まれている。SC-1 は、弥生中期後葉から後期前葉の竪穴式住居跡と考えられる。

以後、IV 層上面を検出し、IV 層に遺物が含まれない

ことを確認して調査を終了した。

## (3) 3 トレンチ (図30-③、写真77~84)

3 トレンチは、東側防矢ネットの両支柱を設置するための調査区である。当初は別々に設定していたが、重機掘削方向の都合上、また予想外の管路出土によって一連の調査区となった。

3 トレンチ南壁では、1・2 トレンチと同じく、ガス管路が現地表下約 30cm であらわれた。トレンチ内東寄りでも、現地表下約 60cm で南北方向の管路が出土した。さらに、トレンチ西部では、的場建築時の余掘りが外壁から約 1.0m までおよんでいる。これらの搅乱を受けでないトレンチ東半部では、現地表下 70cm、標高約 26.9m で城北団地基本層序の III 層があらわれた。

III 層以下の状況を確認するため、調査区の南北壁際で的場建築時の余掘り部分の掘り下げを行った。南側では、現地表下約 105cm で外壁から東に 25cm 飛び出す建物基礎が載るコンクリートがあらわれた。その下層の現地表下約 125cm、標高約 26.45m で、城北団地基本層序の IV 層が出土した。一方、北壁際では、30cm 弱の余掘り埋め戻し土の下に、なお III 層が続いている。

以上のような状況を確認した上で、改めて支柱設置地点の再検討を、施設基盤部とを行い、南西側の支柱は的場外壁隅部に接して一部コンクリート基礎を除去して設けることとなった。その上で、これから 1.7m の距離を測り、できる限り東に寄せて北東側の支柱を設定した。これにより、支柱設置部分について、それぞれ約 40cm 四方を調査対象として該当地点を深掘りすることとした。南西支柱側が南深掘り部分、北東支柱側が北深掘り部分である。

南深掘り部分は、ちょうど的場建物余掘り範囲に収まり、既に余掘り埋め戻し土を掘り下げている。統いてコンクリート基礎も除去し、余掘り底面に IV 層が続くことを確認した。この地点の IV 層は、明黄褐色の砂質～シルト質土で、北深掘り部分よりシルト質・粘性がやや強い。1mm 以上の砂粒はほとんど含まず、土質はしまっている。鉄・マンガン分が沈着する。遺物は出土していない。なお、余掘り東壁では、III 層が厚さ 15cm 前後堆積し、一部に遺構とみられる落ち込みも認められた。1mm 以下の砂粒が少量混じるしまりのある黒褐色砂質土である。

北深掘り部分は、当初東に寄せた 40cm 四方を予定していたが、一連の遺構の落ち込みが認められたため、



写真77 00708調査3 トレンチ遠景 (南東から)



写真79 00708調査3 トレンチ北Ⅲ層検出状況 (南から)



写真78 00708調査3 トレンチⅢ層検出状況 (北から)



写真80 00708調査3 トレンチ北Ⅲ層遺物出土状況 (南から)

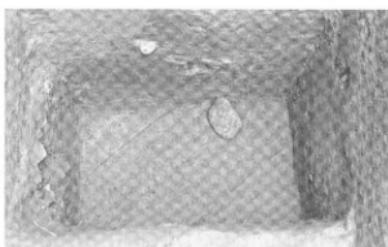


写真81 00708調査3 トレンチ北遺構検出状況 (南から)

先の的場建築時の余掘り以下を含めた、南北約40cm、東西約60cmの範囲となった。落ち込みは、北西から南東方に、最深部では現地表下150cm、標高26.10cmに達する。SX-1とした。上のSX-1-①層は、灰黄褐色砂質上で、細砂・シルトのラミナがみられ、土質はしまりがやや弱い。下層のSX-1-②層は、暗褐色砂質土で、細砂・シルトが縞状に互層堆積する。しまりがややあり、10cm前後の円碟が混じる。窪地への溜まり状の堆積とみられる。

これ以上はⅢ層と判断した。Ⅲ層は4層に細分できるが、一部に遺構埋土を含む可能性がある。Ⅲ-①層は、細砂・シルトをラミナとして含み、砂質の強い暗褐色砂質土。Ⅲ-②層は、細砂を含み、しまりのある黒褐色砂質土。Ⅲ-③層は黒褐色シルト質土。細砂・シルトをラミナとして含み、Ⅳ層の5mmの大ブロックが少量混じる。シルトがやや多く、しまりと粘性がある。弥生土器片などが出土している。Ⅲ-④層は黒褐色シルト質土。細砂・微細砂・シルトをラミナとして含む。

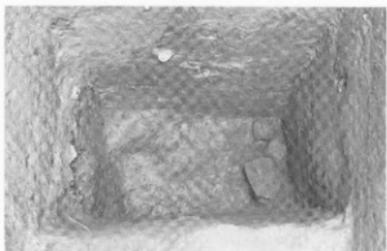


写真82 00708調査3 トレンチ北遺構完掘状況 (南から)



写真83 00708調査3 トレンチ北土層断面 (南から)



写真84 00708調査3 トレンチ完掘状況 (北から)

Ⅲ-③層に比べて砂質が強い。

狭い調査範囲ではあったが、出土遺物は比較的多い。Ⅲ層として順次取り上げ、後の分層によりⅣ層出土とSX-1出土に分離できた。Ⅲ層からは、Ⅲ-②層とⅢ-③層の層界付近に集まり、弥生土器片と3~10cm大の花崗岩の円礫が出土した。円礫の一部には磨面をもつものがある。弥生土器は、壺底部や中期後半の壺下脚部片がある。出土レベル的にはⅢ-③層出土と考えられる土器には、後期複合口縁壺の複合口縁部の破片がある。一方、SX-1から出土した遺物は、SX-1に落ち込んだように、斜面あるいは底面から出土した。弥生土器は、中期後半の大型壺の底部下半の破片あるが、

他は細片ばかりである。3~20cm大の花崗岩円礫も出土している。その多くは部分的に磨面を残している。

### 3 調査の成果

今回調査区周辺の文京遺跡10次調査区や16A次調査区などでは、包含層であるⅢ層が厚く堆積するとともに、遺構も多数存在した。そのような状況が、今回の調査でも確認できた。つまり、1トレンチのSC-5、2トレンチSC-1、3トレンチSX-1である。いずれも弥生中期後葉~後期前葉の遺構で、同時期の文京遺跡弥生集落の居住域が一帯に広がっていることを改めて明らかにできた。

(吉田・三吉)

## 00709 (持田団地) 教育学部附属小学校本館等耐震改修その他工事に伴う全面調査 - 持田団地構内遺跡2次調査 -

調査地点 松山市持田町1丁目5番22号

愛媛大学持田団地

調査面積 137m<sup>2</sup>

調査期間 2007年7月24日~8月10日

調査種別 全面調査

調査担当 吉田広・三吉秀光

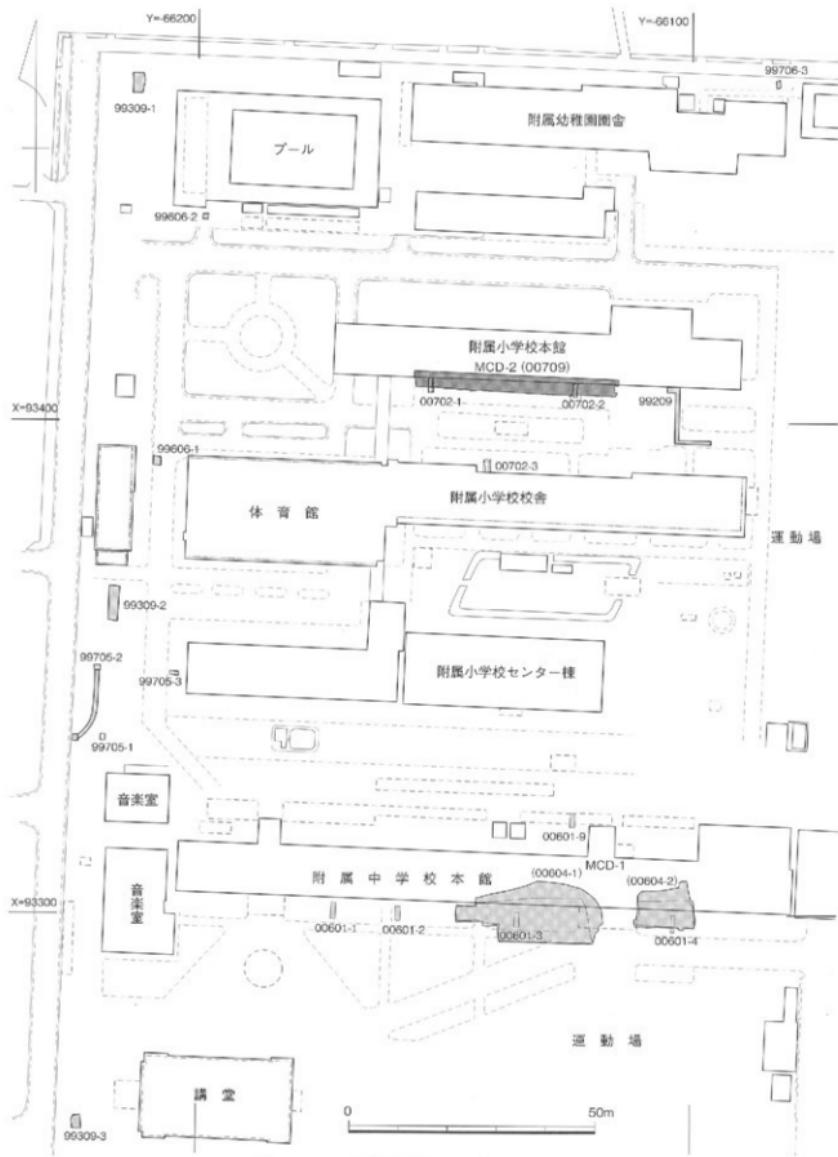


図31 00709調査地点位置図 (縮尺 1/1,000)

(平成19年5月10日付)

## 1 調査にいたる経緯

教育学部附属小学校本館及び校舎に耐震補強工事が計画された。同小学校の所在する持田団地の北部一帯では、中世に遡るとみられる水田層の広がる可能性が高く、調査室と施設基盤部で協議の上、計画策定にあたって、試掘調査（調査番号：00702）を5月15日に行つた。結果、小学校本館南側は、現行廊下犬走りより南には本館建設時の余掘りがおよばず、15世紀後半前後と推定される水田層が広がること、小学校校舎北側は、外壁から1.8m、現地表下約120cmまで建築時の余掘りにより、埋蔵文化財が既に破壊されていることが明らかとなった。工事計画では、本館耐震補強工事は外壁から1.4~4.4mの間を現地表下175cmまで、南側校舎耐震補強工事は外壁から1.0m、現地表下100cmまで掘削する。したがって、前者は埋蔵文化財に影響があり、後者は影響ないことを、5月22日付で施設基盤部に回答するとともに、5月23日付け松山市教育委員会提出の土木工事届においても、意見書として添付した。土木工事届に対し、事前に発掘調査が必要な旨が6月13日付で松山市教育委員会から通知された。6月20日付で発掘届を提出するとともに、発掘調査の準備を進め、小学校の夏休業を待つて調査に着手することとした。

## 2 調査の記録

調査は7月24日に着手し、重機掘削から開始した。ちょうど梅雨明けと同時に酷暑の中、また周囲での工事作業に伴う騒音と粉塵に苦しまされながらの調査となつた。終盤には台風の襲来があり、最終的に調査を終えたのは8月10日である。

調査区は校舎南側に位置し、東西約40m、南北約3.5m、面積137m<sup>2</sup>を測る（図31）。ただし、北側校舎際1.5m前後は建築時の余掘りがおよび、さらに管路等による擾乱も少なくなく、水田層を調査できた範囲は調査区の1/2に満たない。

持田団地では、暫定的ながら以下の基準層位を設定している。

I層：表土・造成土層

II層：水田・畠に利用された耕作土層と母材土壌の自然堆積層（洪水分層）から構成される土層群。

上層をII-1層、下層をII-2層と細分してい

る。

III層：石手川の埋没中州である砂礫層

### （1）II層の調査

I層と近現代の水田層であるII-1層までを重機により取り除き、以下を人力により掘り下げた。II-1層の残存はわずかで、広い範囲においてI層直下のII-2層が出土した。調査区東側では現地表下約20cm、標高34.4m前後、西側では現地表下約50cm、標高34.20~10m前後の高さである。

II-2層は、試掘調査と同じく4層に細分できる。

II-2-①層は、黄褐色～暗灰黄色の砂礫質土で、径1~5mmの砂礫を多く含む。II-2-②層を覆う流水性的堆積であるが、複数単位の堆積からなる。

II-2-②層は暗灰黄色の砂質シルト土で、下層のII-2-③層を3mm前後のブロック状に含むなど攪拌を受けおり、水田耕作土である。II-2-②層上面で耕作関連遺構の平面検出を試み、畦畔とみられる高まりや上部からの動痕とみられる凹凸を若干確認した（図32、写真85）。しかし、壁面土層での追認は十分でなく、先記した覆土II-2-①層に複数回の単位がみられるところから、II-2-②層上面は大きく攪乱を受け、耕作面は残存していないと判断される。

II-2-③層は、明黄褐色砂質土でIII層起源の円礫を少し含み、II-2-②層よりややシルト質は弱い。全体に鉄分が沈着する。II-2-②層の床土部分である。

II-2-④層は、調査区東部でII-2-③層とIII層の間にみられた土層で、II-2-③層よりシルト質が強く土壤化も進んだ暗灰黄色砂質土。III層起源の径1~10cmの円礫を含む。

なお、調査区東端部のII-2-③層とIII層の間には、土器等が集中する落ち込みや、人頭大の円礫を含み込んだシルトの盛り上がりが南壁土層で確認できた。平面検出は十分なし得なかったが、水田面の広がりを画する溝あるいは大畦畔の存在した可能性がある（写真86）。

以上の耕作関連土層のうち、II-2-①層からは近世染付もみられるが、II-2-②層からは内黒の黒色土器の他、少數ながら瓦器小片や羽釜脚片があり、近世に降る遺物は見られない。II-2-③層では内黒の黒色土器あるいは土師器の底盤が出土し、瓦器はみられない。したがって、II-2-②層を耕作土とする水田は、11~14世紀の時間幅の中に位置づけられる。

### （2）III層の調査

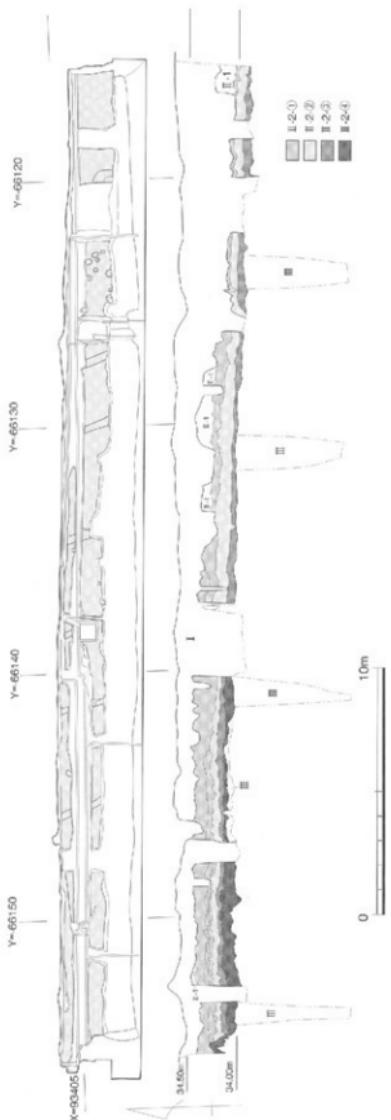


図32 00709調査平面図・土層断面図  
(縮尺 1/200、1/100)

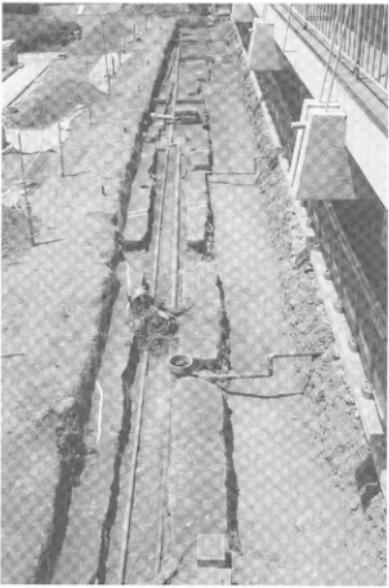


写真85 00709調査水田耕作土検出状況（東から）



写真86 00709調査南壁東端土層（北から）



写真87 00709調査西壁土層（北東から）

Ⅱ層の下部には、砂礫層であるⅢ層が全面に広がる。調査区東側では現地表下50~60cm、標高34.0m前後、西側では現地表下約60~70cm、標高33.90m前後の高さである。崩落しやすい土層であること、また調査期間の制約もあり、調査区全域でのⅢ層掘り下げは行わず、南壁際4ヶ所と西壁際1ヶ所で、工事掘削深度の現地表下175cmまでの掘り下げを行った。Ⅲ層は、その最上位に灰白色砂質土に拳大の円礫が混じる灰白色砂礫土があり、その下で径1~3mmの砂礫を主体とし、拳大の円礫を少し含む灰白色砂質土となり、掘り下げ底付近で径1mm以下の砂粒に2cm前後から人頭大までの円礫を多く含む灰白色砂礫層となる(写真87)。最下部の灰白色砂礫層からは、弥生土器や古代の土師器・須恵土器が出土しているが、いずれ

も磨滅が著しい。

### 3 調査の成果

今回の調査では、持田団地構内遺跡1次調査に統いて、持田団地構内で水田遺構の存在を明らかにできた。水田関連土層の広がりは幅1.5m前後と狭く、平面的には明確な遺構を認識できなかったが、持田団地構内北部においても、水田関連土層が良好に残存していることが判明した。しかも、出土遺物からその時期は、中世前半に遡る可能性が高く、1次調査で出土した近世の水田層と異なる。今後、持田団地構内における水田の広がりを、面的にだけなく通時に追究していくことが必要となる。(吉田)

## 00710 (城北団地) 附属図書館耐震改修その他工事に伴う全面調査 —文京遺跡32次調査—

調査地点 松山市文京町3番  
愛媛大学城北団地

調査面積 23m<sup>2</sup>  
調査期間 2007年8月1日~8月21日、9月7日  
調査種別 全面調査  
調査担当 田崎博之  
調査補助 宮崎直栄・濱田美加  
依頼文書 施設基盤部長発事務連絡  
(平成19年5月10日付)

査区を北から2~4トレンチとした(図33)。

### 3 調査の記録

城北団地全域では、基本層序としてI~V層を設定しているが、今回の調査では、1トレンチでI・II・IV・V層、2・3トレンチでI・III・IV層を確認できた。とくに、1トレンチでは、IV層上面でSP-1~4が出土し、調査区壁面でSP-5を確認した。中世の土師器塊が出土しており、当該期の遺構と考えられる。また、IV層下面で自然流路SR-101が出土した。

#### (1) 1トレンチ(図34、写真88~95)

1トレンチは、図書館西側のスロープ新設と建物増築、これに伴って配管を新設する工事範囲にある。北側のスロープ新設部分をI区、建物増築部分をII区、配管が新設する部分をIII区(写真88~89)として調査を進めた。

I層は造成土である。近代の遺物に混じり、古代後半~中世の土師器や内黒土器が出土している(図35-3・4)。3は土師器塊で、口縁部の反転は非常に緩やかであるが、高台は断面台形で、端部は丸みをおびている。10世紀後半~11世紀代に比定できる。4は内黒の土師器塊の底部破片である。高台は断面台形で小さく低い。先端は丸く收められており、12世紀後半に比定できる。

### 1 調査にいたる経緯

附属図書館の耐震補強工事については、2007年5月23~28日に試掘調査(調査番号:00706)を実施し、建物余掘り内に工事範囲を収めることで、埋蔵文化財への影響を極力抑えるように施設基盤部と協議を進めた。しかし、図書館西側のスロープ新設と増築工事部分、配管新設工事、そして附属図書館書庫と西棟間の管路新設工事については、建物余掘りに工事範囲を収めることができず、全面調査を実施することとなった。

### 2 調査の経緯

今回の調査地点は、附属図書館西側で1ヶ所、附属図書館書庫と西棟間の3ヶ所である。附属図書館西側の調査区を1トレンチ、附属図書館書庫と西棟間の調



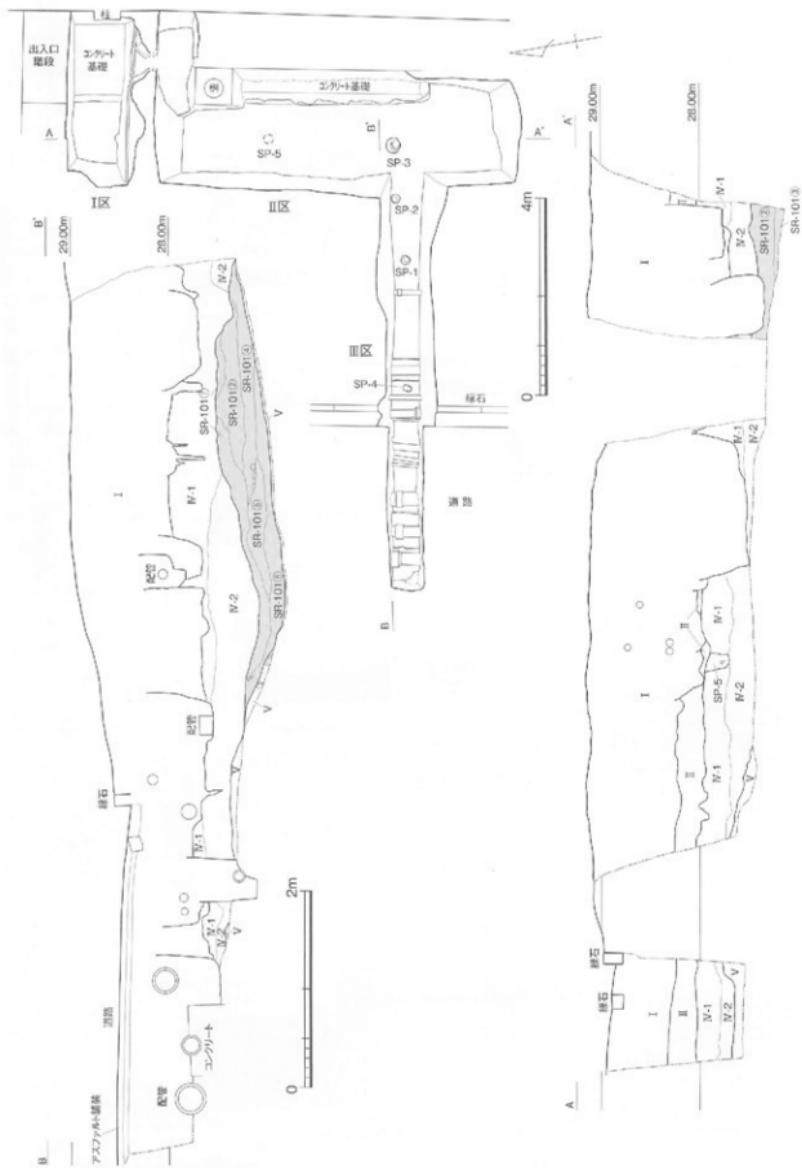


図34 00710調査1 トレンチ平面図・土層断面図（縮尺 1/50、1/100）

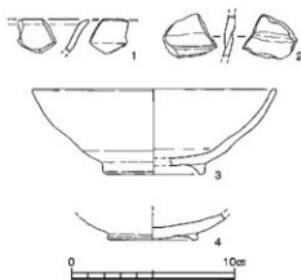


図35 00710調査出土遺物実測図（縮尺 1/3）

II層は、砂疊混じりの灰オリーブ褐色～灰オリーブ色シルトである。径1～5mmの大の角礫が多く混じり、わずかに粘性がある。下部にはマンガンが沈着する。基本層序Ⅲ層は、1トレンチではみられない。IV層はIV-1・2層から構成される。IV-1層は、黄褐色砂質シルトで、きめが細かく疊をほとんど含まない。黒褐色砂質シルトの径3～5mmのブロックが多く斑状に混じる。また、樹木根跡などの生物擾乱が著しい。IV-2層は、微細砂を主体とするにぶい黄褐色砂層で、部分的に褐色砂質シルトの小塊や径2～3cmの円疊が混じる。IV-1層と比べて白っぽく、部分的にごく薄いラミナが観察できる。V層は暗灰色砂疊層で、粗砂に拳大の花崗岩、砂岩の円疊が混じる。V層の上面は、II区北端から南に向かって緩やかに低くなり、II区東半部では谷状の窪地となり、窪地の底面でSR-101を確認した。

1トレンチでは、IV層上面で小穴5基(SP-1～5)、IV層下部で自然流路1条(SR-101)が出土した。小穴の埋土は、いずれも灰色シルト質土で、IV層のにぶい黄褐色シルト塊が混じる。SP-3からは、古代後半の土師器塊が出土した(図35-1)。口縁部周辺の反転が緩やかで10世紀後半～11世紀代のものと考えられる。横方向のナデ調整を施した後、口縁部外面には部分的に横方向のミガキ調整を加えている。SP-5からは、縄文後期の無文深鉢の破片が出土した(図35-2)。粘土紐の接合部分にあたり、肩部付近の破片と考えられる。外面には凹線状のくぼみ、内面には緩やかな段がみられる。以上の出土遺物と埋土の特徴から、SP-1～5は、古代後半～中世に比定できる。

V層上面には北東から南西に向かってのびる浅い谷状の窪地が形成されている。その窪地を流れる自然流路がSR-101である。III区北壁で、SR-101の埋積土を観察できた。①～⑥層から構成され、いずれもラミナが発達している。①層は小疊混じりの黄褐色微細砂層。②層は黄褐色粗砂層で、灰色小疊層のラミナがみられる。③層は灰色粗砂層。④層はにぶい黄褐色微細砂層。⑤層は黄褐色微細砂層で、小疊のラミナがみられる。⑥層は黄褐色部細砂層のラミナが縞状に互層堆積する。部分的に小疊が混じる。SR-101から遺物は出土していない。しかし、層準から考えて縄文後期の自然流路と考えられ、SP-5の埋土中から出土した縄文土器との関連も考えうる。

#### (2) 2トレンチ(図36-①、写真96～99)

2トレンチは、附属図書館書庫と西棟間に設定した調査区の中で、もっとも北側の調査区である。現地表面から90cmほど造成土のI層を掘り下げ、トレンチ中央で南北にのびる配管の下層でIII層があらわれた。III層は暗褐色粘質土で、厚さ25cm前後を測る。後述する3トレンチのIII層と比べて厚く、黒色シルト質土の小塊が混じることから、遺構の埋土である可能性が高い。III-①～④層に分層できる。III-①層は、暗褐色粘質土で、きめが細かくしまりがある。径3～5mmの黒色シルト塊が少量混じる。III-②層は、III-①層と比べて、やや黒みの強い暗褐色粘質土である。径2～3mmの砂粒がやや多く混じる。III-③層は、暗褐色粘質土で、きめが細かくしまりがある。径3～5mmの黒色シルト塊がまばらに混じる。III-④層は、III-①層と比べて、やや黒みをおびる暗褐色粘質土で、きめが細かくしまりがある。径3～5mmの黒色シルト塊が混じる。

III層を掘り下げると、現地表下120cmほどでIV層があらわれた。1トレンチのIV-1層と共通する黄褐色砂質シルトで、III層の土壤化の影響を受けたIV-1-①層と、ほとんど土壤化していないIV-1-②層に分層できる。IV-1-①層は、にぶい黄褐色シルトで、上部はIII層に近く暗褐色となっている。IV-1-②層は、にぶい黄褐色シルトで、やや粘性をおびる。径3～5mmの黒色シルトの小塊が少量混じる。

以上、2トレンチからは遺物は出土していない。

#### (4) 3トレンチ(図36-②、写真96・100～102)

3トレンチは、2トレンチから南へ4m離れた位置にある。2トレンチと同じく、現地表下92cmほど1層を掘り下げた時点で、トレンチの中央部だけにIII層が



写真88 00710調査1 トレンチ遠景（西から）



写真89 00710調査1 トレンチI・II区（北から）



写真90 00710調査1 トレンチI区西端土層断面（北から）



写真91 00710調査1 トレンチII区（南から）



写真92 00710調査1 トレンチII区西壁土層断面

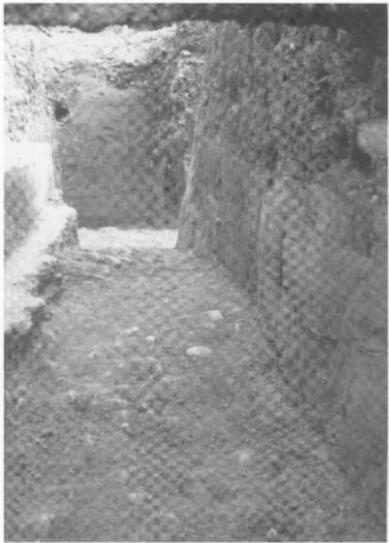


写真93 00710調査1 トレンチII区西壁・南壁土層断面



写真94 00710調査1 トレンチIII区（西から）



写真95 00710調査1 トレンチIII区北壁土層断面



写真96 00710調査2～4 トレンチ（南から）



写真97 00710調査2 トレンチ（西から）

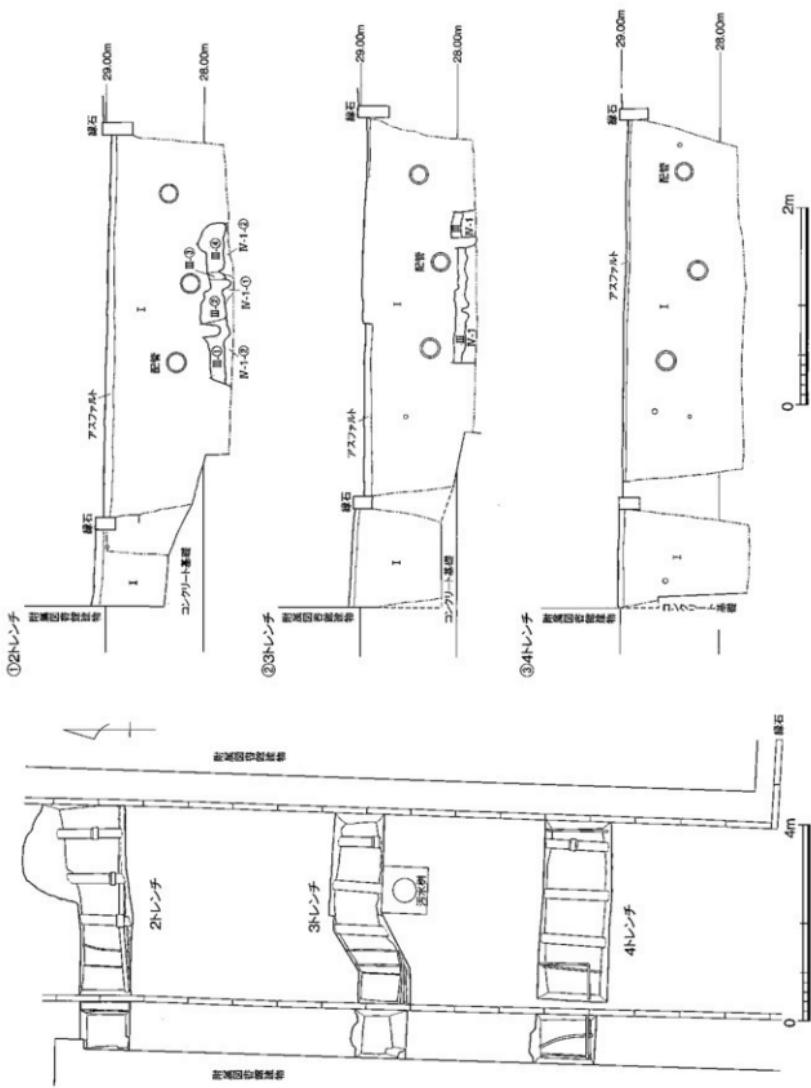


図36 00710調査2～4トレンチ平面図・土層断面図（縮尺 1/50、1/100）

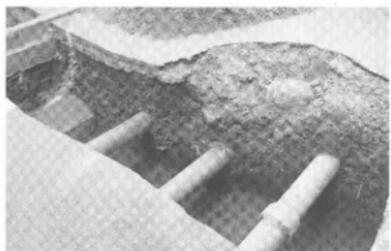


写真98 00710調査2 トレンチ北壁土層断面



写真99 00710調査2 トレンチⅢ層残存状況



写真100 00710調査3 トレンチ（西から）

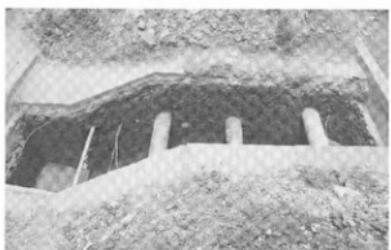


写真101 00710調査3 トレンチ北壁土層断面

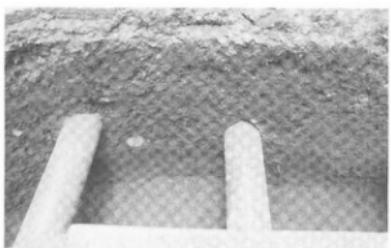


写真102 00710調査3 トレンチⅢ層残存状況

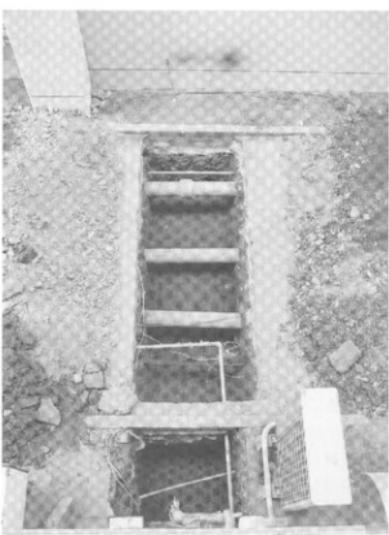


写真103 00710調査4 トレンチ（西から）

残存していることを確認できた。Ⅲ層は、暗褐色粘質土で、2トレンチのⅢ層と比べて、土色はやや明るく、しまりもある。径1~2mmの砂礫が少量混じるとともに、径2~3cmのにぶい黄褐色シルト塊が少量含まれる。

Ⅲ層の下層では、にぶい黄褐色シルト層があらわれた。2トレンチのⅣ-1層に対応する土層である。径1~3cmの暗褐色シルト塊が少量混じる。

#### (5) 4トレンチ (図36-③、写真96・103)

4トレンチは、3トレンチから南へ3.2m離れた位置にある。附属図書館書庫と西棟間に設定したトレンチの中で、もっとも南側の調査区である。現地表面から120cmまで造成土のI層がつづき、調査範囲の全面が擾乱されている。

### 3 調査のまとめ

今回の調査では、1トレンチで古代後半を中心とする小穴と縄文後期の自然流路が出土した。1トレンチの北側30~40m離れた共通教育講義棟南側の00502調査地点や、共通教育管理棟北半部の00707調査地点では、東西にのびる谷状の窪地が確認され、古代後半～

中世の水田が出土している。こうした地点と比べて、1トレンチはⅣ層の出土する標高が高く、周辺は微高地部分にあたるものと考えられる。今回の調査地点は、出土遺構は少ないが、古代後半の集落域であることを推定できる。また、1トレンチのⅣ層下部で確認したSR-101は、北東から南西に向かって流れる小規模な自然流路である。出土遺物はないが、層準から縄文後期の自然流路と考える。1トレンチから南へ20~30m離れた文京遺跡11・31・33次調査地点では、Ⅳ層内で自然流路あるいは窪地への落ち込みが確認され、縄文後期の野外炉や小穴、遺物包含層が出土している。今後、自然地形の復元を進める中で、縄文時代の分布を把握していく作業が必要となってきた。

2・3トレンチでは、建物余掘りで破壊され、部分的であるが基本層序のⅢ層を確認できた。調査範囲が狭く、遺物も出土していないが、2トレンチのⅢ層は3トレンチと比べて厚く、黒色シルト質土の小塊が混じることから、遺構の埋立である可能性がある。周辺に弥生時代～古墳時代の集落域が展開しているものと考えられる。

(田崎・濱田)

## 00711 (城北団地) 法文学部講義棟耐震補強工事に伴う全面調査

### - 文京遺跡33次調査 -

調査地点 松山市文京町3番

愛媛大学城北団地

調査面積 1615m<sup>2</sup>

調査期間 2007年8月20日～10月24日

調査の種別 全面調査

調査担当 田崎博之

調査補助 宮崎直栄・濱田美加

依頼文書 施設基盤部長発事務連絡

(平成19年5月10日付)

こととなるため、工事対象範囲を全面調査することとなった(図33)。

#### 2 基本層序 (図37・38、写真105・106)

今回の調査では、城北団地で設定している基本層序Ⅰ～Ⅳ層を確認した。各基本層序の特徴は、以下の通りである。

Ⅰ層は表土層である。

Ⅱ層は、近代の水田層で、下部には、鉄分・マンガンの沈着する床土層がみられる。

Ⅲ層は、暗褐色砂質シルトで、土質はしまりがある一方で、粘性はなくサラサラしている。明黄褐色及び黄橙色の小指先～親指先大の小塊と黒褐色の径1cmの塊がまばらに混じる。Ⅳ-1層との層界は漸移的である。

Ⅳ層は、Ⅳ-1～Ⅳ-4層に分層でき、さらに細かな土層群から構成される。Ⅳ-1層は、にぶい黄褐色の

#### 1 調査にいたる経緯

法文学部講義棟の耐震補強工事については、2007年5月21日に試掘調査(調査番号:00703)を実施し、建物余掘り内に工事範囲を収めることで、埋蔵文化財への影響を極力抑えるように施設基盤部と協議を進めた。しかし、工事計画では、講義棟北側の玄関周辺を、東西25.6m、南北幅約4.3m、深さ195cmまで掘削する

砂層。調査区全面を覆い、薄く小さなラミナが確認でき、自然堆積層と判断した。IV-1-①層とIV-1-②層からなる。IV-1-①層は、にぶい黄褐色の微細砂～細砂層で、調査区全面を覆う。ラミナが部分的にみられる自然堆積層である。上部は、Ⅲ層との漸移的な変化部分である。IV-1-②層は、CF-28区においてIV-1-①層の下部に堆積する粗砂層で、ラミナが発達する。

IV-2層は、IV-2a層～IV-2cで構成される。IV-2cは自然堆積したシルト質微細砂層で、IV-2a層はそれが土壤化した部分、そしてIV-2b層はIV-2a層からIV-2c層への漸移的な土層である。IV-2a層は、IV-2a-①層とIV-2a-②層で構成される。IV-2a-①層は、にぶい黄橙色の細砂質シルト土で、調査区のほぼ全域を覆うが、東端部には堆積していない。マンガンの斑文がみられるが、IV-2b層ほど多くはない、やや砂質が強い。土壤化した土層とを考えた。IV-1層の層界からのびる植物根性痕が多くみられる。調査区西半のCE-CG-28区では、IV-2a層の上面が、北に向かって落ち込んでいる。また、CE・CF-27・28区の上面ではかなり凹凸があるが、掘り下げても人工的な加工痕は認められなかった。IV-2a-②層は、明黄褐色砂質土層で、粘性はなく、焼土や炭化物は混じらない。IV-2a-①層の下に堆積する。CF-27区の余掘り壁面の一部で確認できた。

IV-2b層は、IV-2b-①層～IV-2b-③層からなる。IV-2b-①層は、にぶい黄褐色の細砂混じりのシルト質土。調査区の全域に厚く堆積する。マンガンの斑文が多くみられる。少量であるが、炭化物の小片が点々と混じる土壤化層である。ただし、余掘り壁面の観察では、ごくまれに炭化物片が確認できたが、平面的に掘り下げても炭化物片はほとんど出土しなかった。2b層は均一のものではなく、下部にいくほど砂質分が強くなり、IV-2c層に近くなる。これは上部からの土壤化の影響が弱まることを示している。IV-2b-②層は、CE-28区においてIV-2b-①層の下部にレンズ状に堆積する細砂のラミナである。IV-2b-③層は、IV-2b-①層と土質・土色が共通する。CE-28区の調査区北壁でIV-2b-②層の下に堆積する。IV-2c層は、にぶい黄橙色のシルト質微細砂層で、調査区の全面に断続的に見られる自然堆積層である。

IV-3層も、IV-2層と同じく、IV-3a層～IV-3cで構成される。IV-3cは自然堆積砂層で、IV-3a層はそれが土壤化した部分、そしてIV-3b層はIV-3a

層からIV-3c層への漸移層である。IV-3a層は、にぶい黄褐色の微細砂質土層で、シルト質が若干入り、土壤化も進んでいると考えられる。下層にいくほど径0.5～1mmの粗砂や小礫が多く混じりはじめる。調査区のほぼ全域を覆う。調査区西部のCF・CH-27・28区では、炭化物片や焼土塊が多くまじる。CG-28区調査区北壁で確認できた凹み部分はシルト分が強い。また、調査区中央～東部ではこうした土壤化したIV-3a層は認められない。

IV-3b層は、IV-3b-①層～IV-3b-③層からなる。IV-3b-①層は、炭化物と焼土が多く混じる。CG-27・28区においてIV-3c層上面に広がる。CH・CG-28区で検出したSF-203は、東へむかってIV-3c層の上面が傾斜する場所で、IV-3c層上面から被熱をうけている。そのため、上層に堆積しているIV-3b-①層に炭化物片・焼土塊がCG-27・28区を中心としてちらばつたものと判断した。IV-3b-②層は、ややシルト質をおびた微細砂層である。にぶい黄橙色を呈し、IV-3a層の影響をうけて若干土壤化が進む。一部小礫が混じる。IV-3b-③層は、小礫が若干まじる点でIV-3c層と共通するが、微細砂で構成されることからIV-3b層の一部とした。上層のIV-3b-②層と比べてシルト質がほとんどない。

IV-3c層は、IV-3c-①層～IV-3c-⑤層で構成される。IV-3c-①層～IV-3c-④層は、にぶい黄橙色微細砂層である。IV-3c-①層は、やや砂混じりできめ細かい。下層にいくほど、径0.5～1mmの粗砂や小礫が多く混じり始める。IV-3c-②層は、①層と比べてやや多くの砂が混じる。基本的に①層と共通する土質である。IV-3c-③層は径1～2cmの大いな小石が混じる。IV-3c-④層は砂質分が非常に強い。IV-3c-⑤層は灰色の粗砂が多く混じる。

IV-4層は、粗砂・小礫からなる砂礫層である。粗砂のラミナがみられる。径3～4cmを超える礫が時おり混じる。当初、基本層序V層と考えたが、黄褐色微細砂層等が含まれているため、IV層の一部と考えた。余掘り壁面と調査区北壁で、IV-4-①層～IV-4-⑬層を観察できた。IV-4-①層は、灰白色の微細砂～細砂層。CF-CG区間南北ベルトでみられる。IV-4-②層は、灰白色の細砂～粗砂に小礫が混じる。調査区中央部付近にあたるCE区西半部からCG区東半部に広がる。IV-4-③層は灰色砂礫層で、調査区西端部に堆積している。IV-4-④層は灰白色粗砂層。CE-CF区間南北ベル

トでみられる。IV-4-⑤層は淡黄色微細砂のラミナで、CE-CF区間南北ベルトでみられる。IV-4-⑥層は灰色細砂～粗砂層。調査区東半部に広く堆積する。IV-4-⑦層は淡黄色微細砂のラミナで、IV-4-⑤層と色調や土質は共通する。CE-CF区間南北ベルトでみられる。IV-4-⑧層は灰白色粗砂層。CC区余掘り壁面で確認した。IV-4-⑨層は灰白色微細砂～細砂層で、CG区余掘り壁面でみられる。IV-4-⑩層は灰白色粗砂層。わずかに小礫が混じる。CC区余掘り壁面でみられる。IV-4-⑪層は黄褐色微細砂層。調査区東半部に部分的に見られる。IV-4-⑫層は灰白色細砂層。CE-CD区南北ベルトと余掘り壁面でみられる。IV-4-⑬層は灰白色粗砂層、CC-27区の余掘り壁面で確認できた。

### 3 出土遺構と遺物

今回の調査では、Ⅲ層上面とIV層上面、IV層中から縄文晩期～中世の遺構と遺物が出土した。Ⅲ層上面で検出した遺構には1～35（ただし、12-14号遺構は欠番）、IV層上面検出の遺構には101～179（121・142・152号遺構は欠番）、IV層中の遺構には201～203の連番の遺構番号を付し、遺構の種別を示す略号を冠している。

Ⅲ層上面の遺構には、溝4条（SD-1～4）、柱穴・杭穴及び小穴28基（SP-5～11、15～35）があり、いずれも古代～中世の遺構である。IV層上面では、溝3条（SD-101～103）、土壙8基（SD-104～110・177）、柱穴及び小穴65基（SP-111～120、122～141、143～151、153～179）が出土し、縄文晩期末～弥生中期の遺構である。そして、IV層中からは、縄文後期の遺物が出土するとともに、炉跡2基（SF-201・203）、土壙1基（SK-202）を検出した。

#### (1) 古代～中世の遺構と遺物（図37-①、写真107）

Ⅲ層上面では、溝4条と、柱穴・杭穴及び小穴が出土した。

〔溝〕

SD-1 調査区西壁沿いのCH-27・28区で出土した南北方向にのびる溝である。北側は調査区外へのび、南側は余掘りで壊されている。検出幅30～68cm、深さ26cmを測る。埋土は砂疊で埋まり、下部にはラミナが発達する。一度埋没した後、再度東半部が掘りこまれている。埋土中から、須恵器の坏身口縁部や壺頸部の破片、土師器皿、土師器高坏、瓦器塊体部片、三足付羽釜の破片のほか、縄文土器・弥生土器・須恵器・土

師器・青磁の小片や安山岩の円礫が出土した。

SD-2 調査区北壁沿いのCD～CG-28区で出土した東西方向にのびる溝である。CD～CF-28区ではSD-3の北側を流れるが、CG-28区の中ほどでSD-3と交差し、CD～CF-28区ではSD-3の北側を流れる。SD-3を切る。幅30～40cm、検出面からの深さは6cmを測る。埋土は、SD-3と比べて小礫が多く混じる砂疊層である。弥生土器の壺口縁部破片や須恵器の坏身受け部・体部破片のほか、弥生土器・土師器の小片が出土した。

SD-3 調査区北端部のCD～CF-27・28区～CG-28区で出土した東西方向にのびる溝である。CD-27・28区で部分的に途切れ。SD-2に切られ、CD～CF-28区ではSD-2の南側を流れ、CG-28区の中ほどでSD-2と交差し、CD～CF-28区ではSD-2の南側を流れる。幅約40cm、検出面からの深さは4cmを測る。粗砂と細砂のラミナが縞状に互層堆積し、Ⅲ層の小塊が多く混じる。弥生土器の小片が出土した。

SD-4 調査区北半部のCE・CF-27区～CG-27・28区で出土した東西方向にのびる溝である。50cmほどの間隔をあけて、SD-2・SD-3の南側を流れる。CF・CG-27区で部分的に途切れています。幅12～30cm、検出面からの深さは約1cmを測り、埋土はSD-3に近い。遺物は、弥生土器の小片が出土した。

〔柱穴・杭穴及び小穴〕

28基が出土したが、SD-2～3の周辺に集中して分布する。いずれもの埋土も、灰褐色の小礫・粗砂である。Ⅲ層の砂質シルトや、Ⅱ層下半に見られるマンガンが沈着した橙色砂質シルトの小塊も混じる。

#### (2) 縄文晩期末～弥生時代の遺構と遺物

（図37-②、写真108～112）

IV層上面では、溝3条、土壙8基、柱穴及び小穴が出土した。

〔溝〕

SD-101 CG-27・28区で南北方向にのびる溝である。北側は調査区外へのび、南側は余掘りで壊されている。幅70～90cm、検出面からの深さは14cmを測る。SP-122・123を切り、SP-118・119・120・124に切られている。埋土上部は暗褐色砂質シルト土～暗褐色シルト土、下部は褐色シルトを主体とする。全体に黒褐色シルト土やにぶい黄褐色シルトの小塊が混じる。弥生土器の小片が出土した。

SD-102 CE-27区で東西方向にのびる溝である。

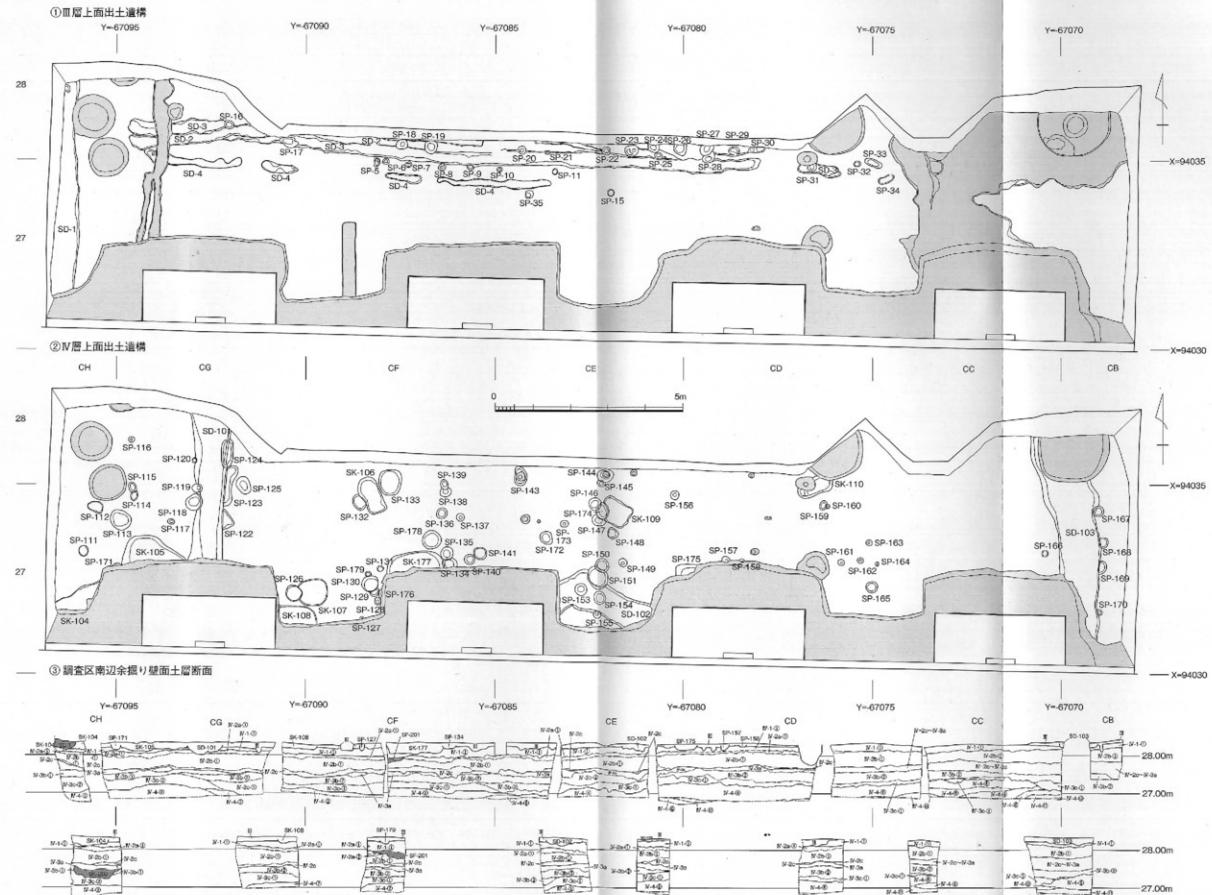


図37 00711調査Ⅲ層及びⅣ層上面出土遺構配置図、余掘り壁面土層断面図（縮尺1/100）



写真104 00711調査表土剥ぎ作業と移植作業



写真105 00711調査余掘り壁土層断面 (CE・CF-27区)

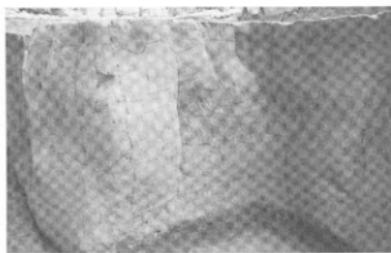


写真106 00711調査IV層 (CF-27区) の遺物・炭化物包含状況

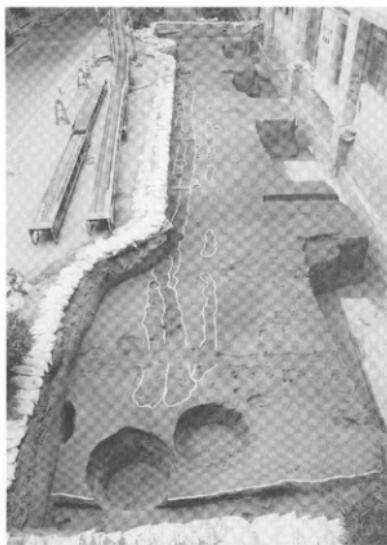


写真107 00711調査III層上面遺構完掘状況 (西から)

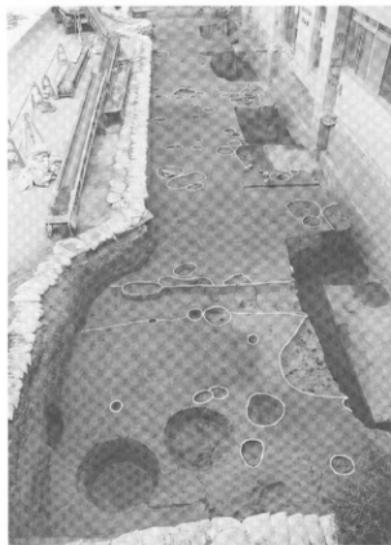


写真108 00711調査IV層上面遺構完掘状況 (西から)

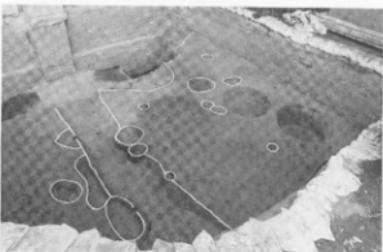


写真109 00711調査 SD-101完掘状況（北東から）



写真110 00711調査 SD-103完掘状況（北西から）

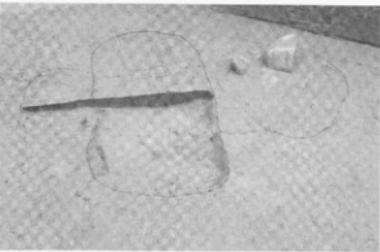


写真111 00711調査 SK-106・SP-133検出状況（南東から）



写真112 00711調査 SK-109遺物出土状況（北から）



写真113 00711調査IV-2層上面（CF-27・28区、北西から）



写真114 00711調査 SF-201完掘状況（東から）

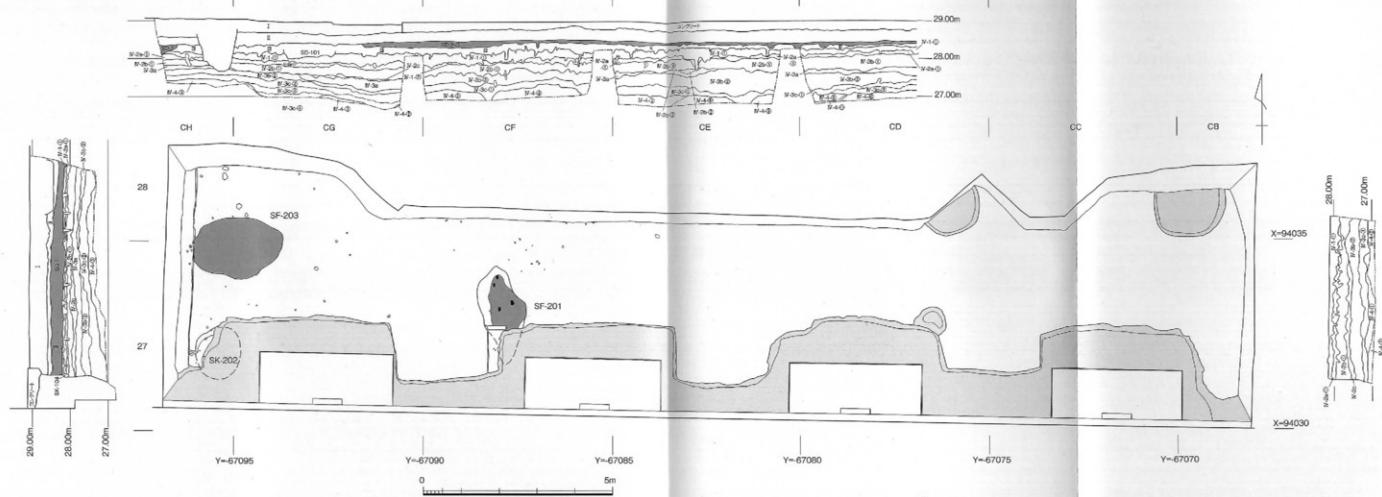


写真115 00711調査 SF-203検出状況（北東から）

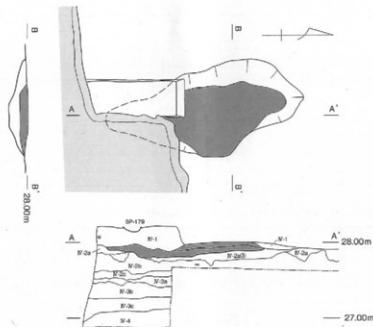


写真116 00711調査 SF-203周辺遺物出土状況

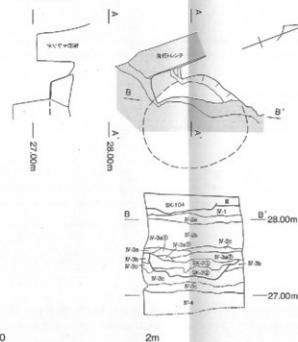
① 調査区西壁及び北壁土層断面・IV層中出土の遺構



②SF-201



③SK-202



④SF-203

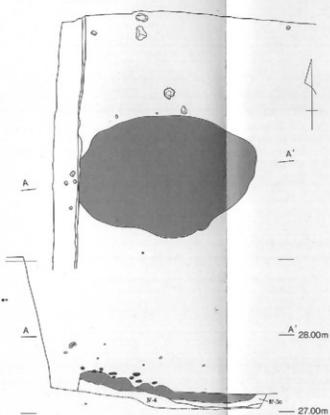


図38 00711調査IV層遺構配置図、調査区北壁土層断面図（縮尺 1/50、1/100）

CE-27区の中ほどでL字形に屈曲し、南東方向と南西方向にのびる。東西端ともに余掘りで破壊されている。幅72~108cm、検出面からの深さは9cmを測る。SP-151・153・154・155に切られる。埋土は暗褐色砂質シルト土ないしは褐色シルト土である。弥生土器の小片が出土した。

**SD-103** CB・CC-27・28区で南北方向にのびる溝である。北側は調査区外にのびるが、攪乱及び余掘りで部分的に破壊されている。幅102~134cm、検出面からの深さは11cmを測る。SP-168・169を切り、SP-167・170に切られる。埋土の上部は暗褐色砂質シルト土で、下部はにぶい黄褐色砂質シルトで、暗褐色砂質シルト土の不整形な1~2cmの大塊が多く混じる。弥生土器の小片が出土した。

#### 【土壤】

**SK-104** CH-27区の南東部に位置する。残存範囲は54×132cmで、検出面からの深さは約3~10cmを測る。底面はかなり凹凸がある。埋土は暗褐色砂質シルト土であるが、下層のIV-1層と漸移的に変化するので、IV層上面に残された自然の窪みとえた。東端部より弥生土器の小片が出土している。

**SK-105** CG-27区の南西部に位置する。長円形と推定される土壌である。南側は余掘りで破壊されている。推定長径170cmで、検出面からの深さは約6~12cmを測る。底面は浅いすり鉢状にくぼみ、かなり凹凸がある。埋土の大部分は、やや明るいにぶい黄褐色砂質土で、黒褐色砂質土の径5~10mmの小塊がやや多く混じる。遺物は出土していない。

**SK-106** CF-27・28区の北半部に位置する。短軸長46cm、長軸長100cm、検出面からの深さは約7cmを測る隅丸長方形の土壌である。SP-132を切る。底面は緩やかな舟底状である。埋土は暗褐色シルト質土で、シルト質が非常に強く、粘性・しまりがある。西半部にはIV-1層の小塊が混じる。遺物は、弥生土器の小破片が出土した。

**SK-107** CF・CG-27区に位置する、径70~80cmの円形の土壌である。検出面からの深さは約5cmを測る。SP-126に切られる。埋土は暗褐色シルト質土で、粘性やしまりではなく、黒褐色の5mmの大塊をまばらに含む。遺物は縄文土器の小片が出土した。

**SK-108** CF・CG-27区で、SK-107・SP-126の南側に位置する。長円形と推定される土壌である。大部分が余掘りで壊されており、北東部のみ残る。残存範囲

は南北48cm、東西100cmで、深さ約6cmを測る。埋土は暗褐色シルト質土で、粘性やしまりではなく、黒褐色の5~10mmの大塊をまばらに含む。遺物は出土していない。

**SK-109** CE-27区の北半部に位置する、62×80cmの隅丸長方形の土壌である。検出面からの深さは約12cmを測る。底面はかなり凹凸がある。SP-147を切り、SP-174に切られる。埋土はやや黒みの強い暗褐色砂質シルト質土で、浅黄色砂質土とにぶい黄褐色砂質シルトの小指先大小の塊が多く混じる。遺物は、底面に貼りついたような状態で刻目凸帯文土器と安山岩の亜角礫が出土している。

**SK-110** CD-27・28区に位置する、径44~98cmの長円形の土壌である。底面は深い舟底状で、検出面からの深さは約12cmを測る。擾乱で北東隅と北西の一部が破壊されている。埋土は暗褐色砂質シルト土を主体として浅黄色砂質土が多く混じり、全体として明るめの土色を呈する。また、浅黄色砂質土の小指先の大塊が多く混じる。南半部から砂岩の円礫が出土した。

**SK-177** CF-27区のほぼ中央に位置する、長径153cmの長円形の土壌である。検出面からの深さは約17cmを測り、底面はかなり凹凸がある。埋土は暗褐色砂質シルト土を主体とする。深鉢の胴部片と考えられる縄文土器の破片が出土した。

#### 【柱穴・杭穴】

65基の柱穴及び小穴が出土したが、その中で、SP-113・136・141・148・154・165・172では立柱痕跡を確認した。しかし、掘立柱建物を構成する配置にはない。

#### (3) 縄文晚期の遺構と遺物(図38、写真113~116)

野外炉2基と土壤1基が出土した。

#### 【野外炉跡】

**SF-1** CF-27区の北半に位置し、IV-2a層上面で出土した。短軸長116cm、長軸長260cmの不整な長円形の炉跡である。中央部の検出面からの深さは約25cmを測る。粘性のない、にぶい黄橙色砂質シルトである③層の上に、炭化物・焼土塊を多く含む褐色砂質土の①層・②層がレンズ状に堆積する。②層は①層よりも褐色が強い。遺物は、①層上面より縄文土器の口縁部破片・③層より縄文土器の小片が出土している。また、①層・②層からは多くの炭化物・焼土塊が出土しており、中には長辺15cmの木片状の炭化物もみられる。

**SF-3** CG・CH-27区では、発掘に着手した当初か

ら、余掘り壁面の土層観察でIV-3c層に炭化物や焼土の小塊が含まれていることに気がついていた。周辺を精査しながら掘り下げていき、南北長158cm～東西長推定248cmの長円形の野外炉跡を確認した。東北へ向かってIV-3c層が傾斜する地点にあたり、IV-3c層上面から熱をうけているものと判断した。火熱を受けた部分は基本的にIV-3c層であるが、西側では一部IV-4層までおよぶ。遺物は出土していない。

#### [土壤]

SK-2 CH-27区では、発掘当初から、余掘り壁面の土層観察でIV-3b層を掘り込む土壤の断面を確認できていた。IV-3b層の上面で長円形の土壤を確認できた。残存範囲30cm×104cmで、検出面からの深さは約26cmを測る。IV-3b層上面から掘りこまれている。埋土は①層・②層に分かれる。①層は砂礫がごく少量混じるシルト質微細砂質土で、淡い暗褐色を呈する。炭化物・焼土塊が多く混じる。②層はやや明るいにぶい黄褐色で、砂礫の混じりが多くなる。炭化物・焼土が混じる。遺物は出土していない。

#### 4 調査のまとめ

今回の調査では、中世～古代の溝、縄文晩期末の土壤、弥生時代の溝、そして縄文後期の野外炉跡と土壤が出土した。その中で、縄文晩期末の遺構・遺物は、周辺ではこれまで知られていなかった時期のものであり、土壤が出土しているので周辺に集落域が展開している可能性が高い。文京遺跡では、これまで北西部の

9次調査地点で遺物包含層が確認され、理学部がある遺跡北東部の8・21・24次調査地点では土壤や土器溜まりが出土している。今回の調査によって、南東部にも当該期の集落域が確認されることになる。

一方、弥生時代の遺構はかなり希薄な分布状況である。Ⅲ層から出土する弥生時代の遺物も、西側へ45mほど離れた法文学部本館の3次調査地点と比べて、極端に少ない。西側へ10mほど離れた11次調査地点でも同様であり、工学部本館・1～5号館、法文学部本館、総合研究棟2の周辺に展開する弥生中期後葉～後期前葉の大規模集落の東限を明らかにできた。

基本層序IV層から縄文後期の遺構と遺物が出土したことはとくに注目される。縄文後期の遺構と遺物は、11次調査地点で野外炉跡や多くの遺物が出土している。今回の調査地点から南西に約40m離れた法文学部2号館西側の31次調査地点でも土壤などが発見され、南東へ30mほど離れた00501調査地点では竪穴式住居跡または大型土壙を余掘り壁面で確認している。この他、99313調査4トレンチではIV層中から縄文後期土器が出土し、32次調査1トレンチでは自然流路が発見され、古代後半の小穴から縄文土器が出土している。しかし、これまでの調査範囲は狭いため、自然地形と遺構・遺物を有機的に結びつけた検討ができなかった。今回の調査では、比較的広い範囲を発掘でき、縄文後期の自然地形と遺構の動態を復元できるデータを得ることができた。

(田崎・濱田)

### 00712 共通教育管理棟耐震改修その他工事に伴う全面調査 -文京遺跡第34次調査-

調査地点 松山市文京町3番

愛媛大学城北団地

調査面積 533.3m<sup>2</sup>

調査期間 2007年8月20日～2008年2月8日

調査種別 全面調査

調査担当 吉田広・三吉秀充

依頼文書 施設基盤部長発事務連絡

(平成19年5月10日付)

#### 1 調査にいたる経緯

大学構内の既設建物の耐震補強工事が一括計画さ

れ、共通教育管理棟北半部の工事が具体化した。これに伴い埋蔵文化財調査室では、工事計画に応じた試掘調査(00707調査)を実施し、工事範囲内の埋蔵文化財の状況を確認した。その結果、耐震補強基礎設置他が計画されている東棟東西両側、北棟南北両側、そして西棟東西両側のいずれにおいても、埋蔵文化財が良好に残存し、工事掘削深度で影響の及ぶことが明らかとなった。

試掘結果を6月12日付で埋蔵文化財調査室から施設基盤部に報告するとともに、同日付で松山市教育委員会に提出した土木工事届に意見書として添付した。土

木工事届に対して、事前に発掘調査の必要な旨が7月2日付で通知され、7月9日付で発掘届を提出し、発掘調査の準備を進めた。この間に一部工事計画の変更があり、西棟東側の工事は行われないこととなった。発掘届に対する通知は7月24日付で得たが、持田園地構内遺跡2次調査(00709調査)を実施中であり、発掘調査の開始はこれを終えてからとなった。

なお、工事内容の変更は調査開始後も続き、その都度土木工事届を再提出し、4度におよんだ。中でも、建物内部床下部分にも埋蔵文化財が良好に残存することが調査開始後に判明し、東棟内部の階段基礎新設範囲を新たに発掘対象とすることとした。

## 2 調査の記録

発掘調査は8月20日に開始し、最終的にX区の調査を終えたのが2月8日である。掘削工事範囲は耐震補強基礎設置を中心としており、建物壁際2~3mで建物各辺に分かれ、工程もそれぞれ異なるために、調査もこれに応じて工程順に行っていくこととした。調査区

はI~X区におよぶ。また、このような調査区配置のため、測量基準は建物におよそ平行な任意の方眼を、中庭側のI~III区と外側にIV~X区でそれぞれ別に用いている(図39)。

### (1) I区(図40、写真117~120)

I区は中庭側、東棟西辺と北棟南辺の耐震補強基礎設置工事に伴う調査区である。幅は建物外壁から2.5m、東棟に沿った南北辺は約22.5m、北棟に沿った東西辺は約40mを測り、L字形を呈する。L字形のコーナー部に測量用の仮原点を置き、これを基準として5mごとに区割した。南北辺南からIA区とし、コーナー部がIE区、東西辺西端がIM区である。

重機掘削によりI層とII~I層を取り除いたが、南北辺では管路が縦横に走り、東西辺の南壁部分にも管路が埋設され、土層観察の障害となった。一方、建物側は建築に伴う余掘りが柱基礎部分のみ、浅い地中梁下には未攪乱の埋蔵文化財が残り、建物内部へと続くことが明らかとなった。このような状況から、土層観察は、断続的なながら柱基礎間の地中梁以下で行うこと

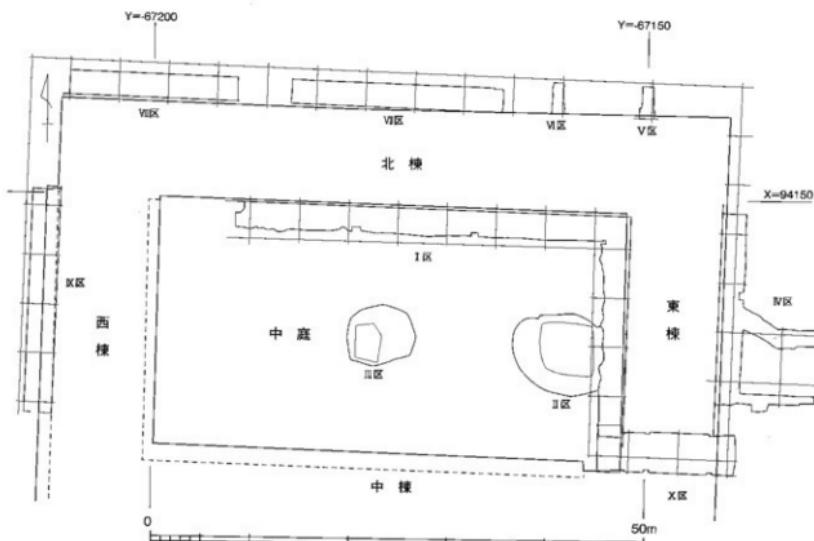


図39 00712調査区配置図(縮尺1/500)

とした。

南北辺北半と東西辺全域においては、Ⅱ・1層下に中世以前に遡る水田関連土層であるⅡ・2層が広がる。流水性の堆積である砂礫層と耕作土が互層状に重なり、水田耕作土層として、Ⅱ・2・②層、Ⅱ・2・③層、Ⅱ・2・④層の3層を認めた。しかし、耕作土上面が砂礫層により良好な状態に保たれていた範囲は狭い。加えて、断続的な断面観察に拘らざるを得なかつたため、水田関連構造は一部の溝や畦畔を確認したにとどまる(写真117)。出土遺物は多くない。かつ細片が多いが、最上部の砂礫層から土師質土器羽釜、Ⅱ・2・③層上の砂礫層から瓦器片、Ⅱ・2・④層からは底部の立ち上がりが微弱なヘラ切り痕を残す土師器坏が出土している。したがって、11~14世紀の幅に水田層の時期を求められることになる。

Ⅱ・2層以下は、砂層・砂礫層からなる流水性の堆積層となり、SR-101とした。ⅠC区でⅣ層上面が落ち込む南岸を検出している。Ⅱ・2層を掘り下げたところで工事用の掘削深度を越えており、SR-101の掘り下げは、断面観察を行った柱基礎間に断ち割つたにとどめている。流路方向と交差する南北辺北半のⅠD・ⅠE区では現地表下約3mまで掘り下げたが、SR-101底面の検出には到らなかった。SR-101からは、弥生土器・土師器など須恵器など弥生時代から古代の遺物が出土している。最新相としては、本来しっかり立ち上がっていった底部が自重で潰れたような、ヘラ切り痕を残す土師器坏が出土しており、10世紀末頃に埋没していたことがうかがえる。

SR-101の南側では、Ⅳ層を切り込む遺構が若干出土した(写真118)。SD-124はSR-101の南岸に切られ、これには平行する溝、幅約80cm、深さ約30cmを測る。遺物は出土していない(写真120)。

SX-120はIA区・IB区に広がる落ち込み。最上部に黒褐色シルト質土、その下に黄灰色砂礫層、オリーブ褐色シルト質土が溜まり状に堆積する。調査区東半にはⅣ層が残り、SX-120南側を画す。出土遺物は少なく、細片のみで詳細不明。

調査区南端では、Ⅳ層を再び切り込む落ち込みがありSR-122とした。調査区西半ではSX-120と合流した格好である(写真119)。調査区西壁では暗灰黄色の微細砂層が、SX-120の溜まり状堆積の下に厚く堆積する。さらにその下には、流水性のシルト層・砂層・砂礫層が互層堆積し、底面の凹凸が著しい。出土遺物は

弥生土器に限られるようである。

なお、SX-120とSR-122間のⅣ層を掘り下げ、標高26.40m前後でⅤ層が出土した。Ⅳ層は厚さ100cmを超えるが、遺物は出土していない。

### (2) Ⅱ区(図40、写真121)

一連の工事に先行して、中庭部分に存在した仮設建物等の撤去工事が行われた。地盤掘削が伴う場合は事前に埋蔵文化財調査室までの連絡を依頼していたが、持田団地構内遺跡2次調査と重なっていたこともあり、十分な調整を行えないままであった。その結果、中庭東部に位置した地下タンク撤去により、広範囲が深く掘り返され、壁面に埋蔵文化財が露出した状態となってしまった。施工業者及び施設基盤部と現地で協議し、これ以上の掘削は行わないこと、現状を保存し、埋蔵文化財に関する記録を行うため、この掘削範囲も本調査の対象とすることとした。これがⅡ区である。

IB・IC区西側に接して、やや不整形な7m四方の範囲が、現地表下約2.7mまで掘りかえされた状態で、それ以上の掘り下げは行わず、断面観察の記録を行った。西壁北側1/3では、現地表下約100cmでⅡ・2層が見られる。最上部を砂礫層が覆い、以下はⅡ・2・③層、Ⅱ・2・④層に相当する。

この下には砂層・砂礫層からなる流水性の堆積層が、掘削範囲内は続き、SR-201とした。IC区で検出したSR-101南岸の西側延長にはほぼ一致し、一連の流路であることが明らかである。

西壁南側及び南壁では、Ⅱ・2層もSR-201も認められず、Ⅱ・1層下でⅣ層が出土する。I区のSX-120の広がりも認められなかった。Ⅳ層下ではⅤ層が認められ、出土標高は南壁東端で標高26.30m、南壁西端及び西壁で25.80m前後と、西側に低くなっている。なお、遺物出土は確認していない。

### (3) Ⅲ区(図40、写真122)

II区同様に、中庭中央部でも水槽撤去工事が行われており、ここでも掘削壁面に埋蔵文化財が露出した状態を確認した。撤去工事を途中で中断し、施工業者及び施設基盤部と協議を行い、これからコンクリート撤去で地盤掘削を行わないこと、現状を保存し、埋蔵文化財に関する記録を行うため、この掘削範囲も調査対象とすることとした。Ⅲ区とした。

中庭中央部、IJ区の南約7mに位置する。水槽西端部を撤去していたところで発見し、掘り返されていた範囲は、南北約4m・東西約3mの不整な長方形。

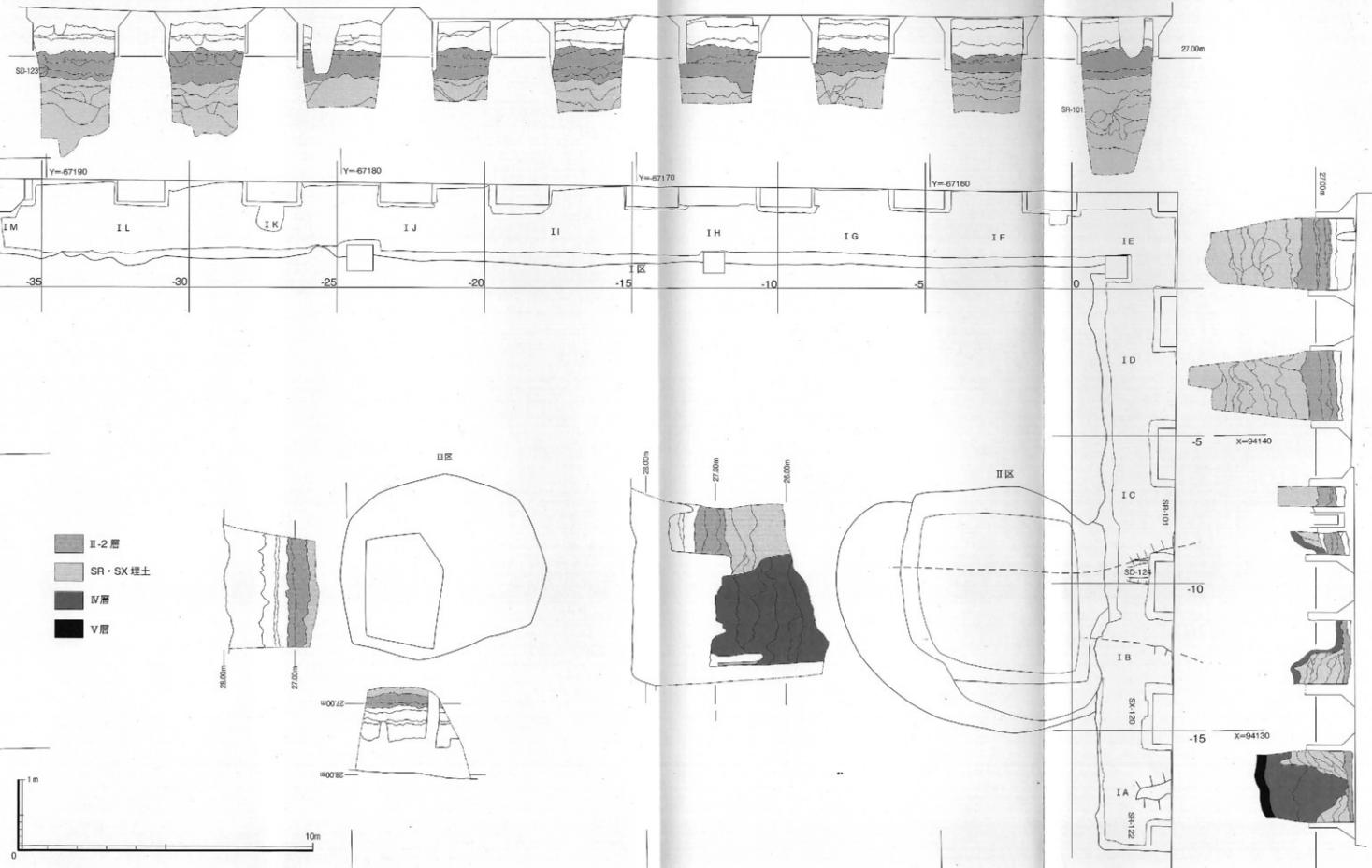


図40 00712調査I～III区平面図及び土層断面図（縮尺1/120、1/50）

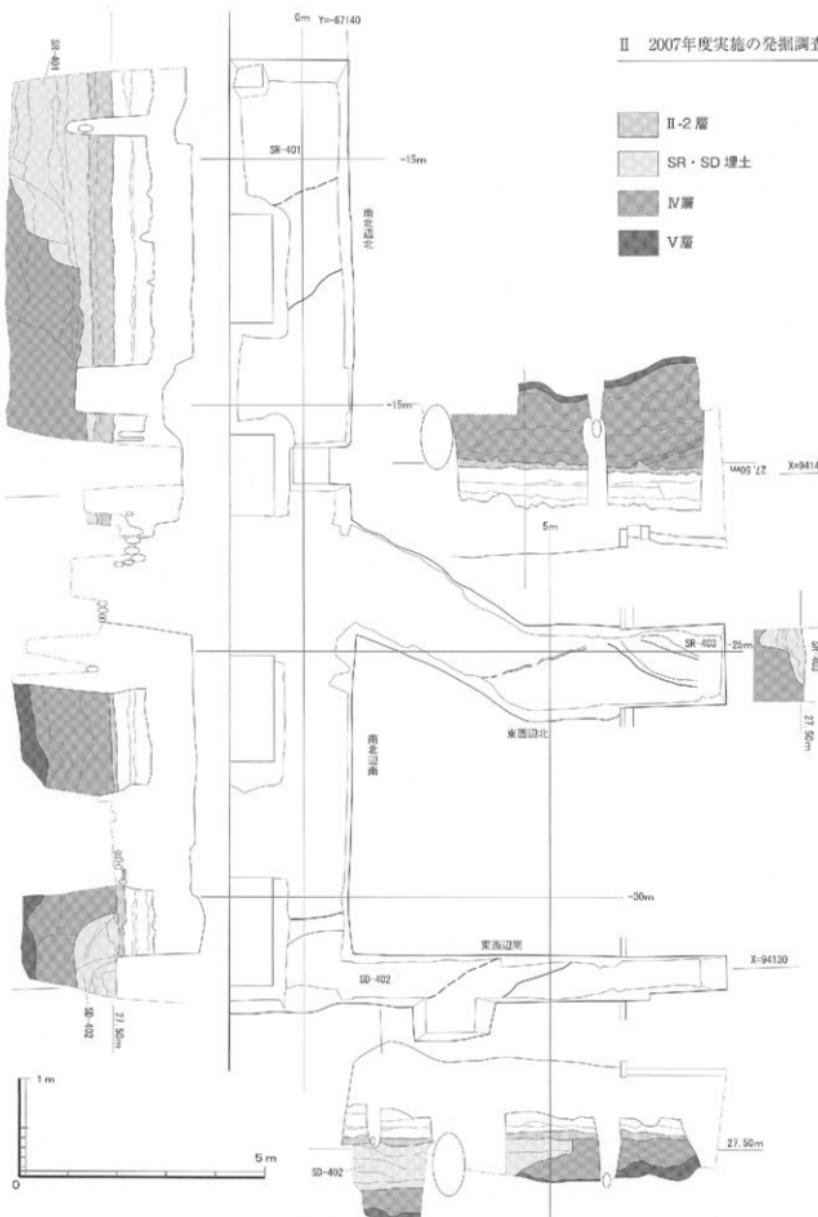


図41 00712調査IV区平面図及び土層断面図（縮尺 1/100、1/50）

深さは現地表下120~130cmに達していた。水槽西端部にあたり、水槽西辺に平行する西壁と南辺西端部に平行する南壁において、土層堆積状況の確認・記録を行った。全城にⅠ区と同様のⅡ層が広がり、Ⅱ-1層は現地表下80~90cmまで達し、以下がⅡ-2層となる。最上部の砂礫層下に、耕作土層が1枚あり、Ⅰ区のⅡ-2-②層に相当するとした。Ⅱ-2-②層上面は27.00~27.05mを測る。

Ⅱ-2-②層下は、攪拌を受けていないシルト層あるいは円礫を多く含んだ砂質土層となり、流路内堆積の最上部とした。SR-301としたが、Ⅰ区のSR-101、Ⅱ区のSR-201と一連の流路とみられる。なお、断面精査中等でも遺物は出土していない。

#### (4) IV区（図41、写真123~127）

IV区は東棟東側の、耐震補強基礎工事と新設管路に伴う調査区で、前者が外壁に平行するのに対し、後者はそれから直交ないし斜め方向に2ヶ所が東に延び、全体に逆F字形の調査区である。前者を南北辺と呼称し、東西の分岐部分で南北に分割した。幅約2.5m、長さ約19.5mである。一方、後者は幅1.5~2.0m、途中屈曲するが東西約8mを測る北側を東西辺とし、幅約1.5m、長さ約7.5mの南側を東西辺とした。なお、IV区以降は新たに建物北東隅部分に仮原点を置き、そこから各トレンチの配置を測量している。

重機掘削によりⅠ層とⅡ-1層を取り除いたが、Ⅰ区同様、建物余掘りは柱基礎部分のみで、地中梁以下には埋蔵文化財が残存することを確認できた。ただし、建物際や東側道路下の共同溝への管路埋設が多く、調査区内が分断される格好である。

南北辺北では、中世以前に遡るとみられる水田関連土層であるⅡ-2層が2層認められた。標高27.30~27.50cmの、約20cmの厚さである。ただし、砂礫層を挟まず、畦畔や溝などは見いただせていない。出土遺物には中世の土師器や瓦器の細片がみられるが、詳細な時期は特定できない。また、Ⅰ区水田層との対応も現時点では明確でない。

Ⅱ-2層下は、最上部に暗灰黄色の砂礫質土が広く堆積し、その下北半でⅣ層が大きく落ち込み、砂・砂礫が互層をなす流路内堆積となる。SR-401とした。建物西側のⅠ区南北辺で認めたSR-101の南岸とほぼ一致し、SR-101とSR-401は一連の流路とみられる。SR-401からは、弥生時代から古代の遺物が出土している。最上部の暗灰黄色砂礫質土から白磁・青磁片が出

しており、最終埋没が12世紀以降となると判断できた。なお、SR-401は工事掘削深度の標高26.50m前後まで掘り下げたが、流路の底には達していない（写真126）。

中世以前に遡る水田層は、南北辺北を除いて認められず、他ではⅡ-1層下に薄い砂礫層が広がる。この中には土師質土器羽釜脚が含まれ、14世紀頃の堆積とみられる。砂礫層下、Ⅳ層上面で遺構が出土した。

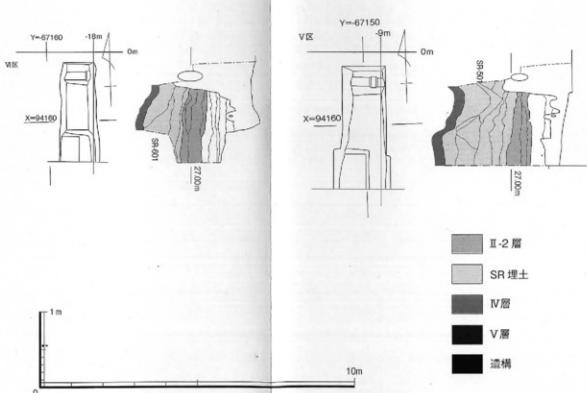
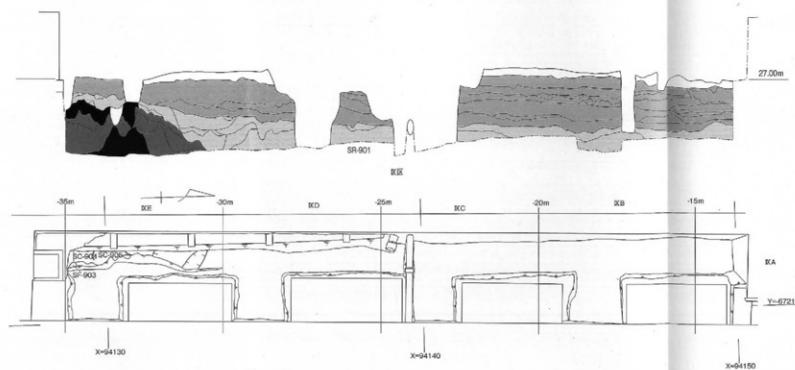
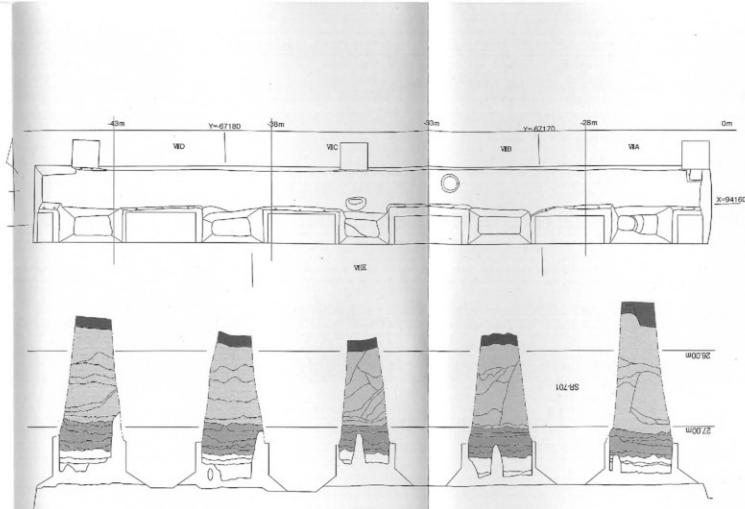
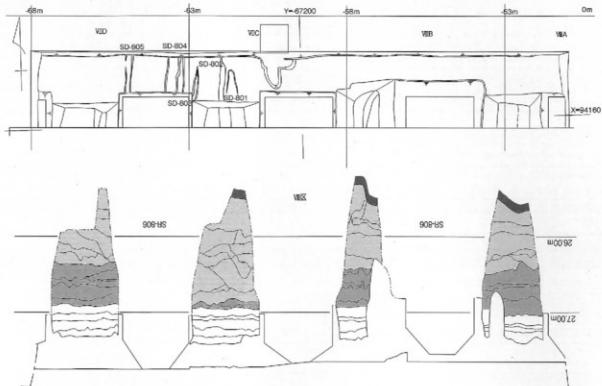
東西辺北東端部では北側への落ち込みが認められた。当初、南北辺北のSR-401と一連の流路とみなし、SR-401としたが、わずかながらも底面の北側への立ち上がりがあり、別単位の可能性を考慮して、SR-403とした。15cm程度の深さから、さらにもう一段約30cmほど落ち込む。出土遺物は少ないが、瓦器細片を含む（写真123）。

南北辺南の南端から東西辺南の西半にかけて検出したのがSD-402である。東北東~西南西方向に調査区内を走り、推定される幅は約2m。南北辺東壁土層の観察によれば、大きく南北2単位の堆積があり、深さ約40cmを測る。出土遺物には弥生土器と中世土師器細片がある（写真124・127）。

IV区周辺で行った試掘調査（00707調査6トレンチ）では、Ⅳ層の一部が土壤化し、縄文土器の出土もみられた。そのため、IV区の本調査においてⅣ層の掘り下げを行った。南北辺北部では、SR-401と同じ深さまで掘り下げたが、なおⅣ層が続き、V層の出土に到っていない（写真125）。南北辺南部では、厚さは70cm前後のⅣ層下、標高26.80m前後でV層となる。東西辺南の東端では標高27.40m前後でV層が出土した。ただし、これらの範囲ではⅣ層から遺物は出土していない。一方、東西辺北の東部でも同様にⅣ層を掘り下げたところ、東側に傾斜する堆積が認められた。上から灰黄色砂層、にぶい黄色砂質シルト層、そしてオリーブ褐色シルト層であり、オリーブ褐色シルト層は径2mmほどの炭化物を含み、土壤化が進行している。土壤サンプルを採取し、詳細は今後の分析に扱るが、試掘調査（00707調査6トレンチ）のⅣ-④層とはやや土質が異なるものの、縄文時代に遡る遺構あるいは包含層である可能性が高い。なお、今回の調査範囲内で遺物は出土していない。

#### (5) V区（図42、写真128）

V区は北棟北側、仮原点から西約9mに位置する。管路新設に伴う調査区で、東西幅1.0~1.2m、南北長3.1



II-2 層  
 SR 埋土  
 IV 層  
 V 層  
 造構

図42 00712調査V～IX区平面図及び土層断面図（縮尺 1/120、1/50）

mを測る。

II - 1層下、標高27.25mで出土する砂礫層以下がII - 2層となり、砂礫層下に水田層を2層認めた。遺物は出土していない。

耕作土下、27.00m前後以下は、流水性の堆積となり、SR-501とした。SR-101・SR-401と一連の流路とみられる。特に下部にはラミナの発達した砂層・砂礫層が互層状に堆積する。調査区北部では、標高26.40m前後、南部では26.10m前後でIV層が出土し、南に傾斜した底面となる。建物南側のI区東西辺でSR-101底面を確認できなかったが、この位置でSR-501の底面が北側上がりに確認できることから、一連の流路の北岸が、V区より北に遠くない位置にあることを窺える。SR-501からは、弥生土器から古代の須恵器・土師器が出土している。

#### (6) VI区（図42、写真129）

VI区も北棟北側、仮原点から西に約18mに位置する、管路新設に伴う調査区である。東西幅約12m、南北長約3.2mを測る。

II - 1層下、標高27.20m前後で出土する砂礫層以下がII - 2層となり、砂礫層下に水田耕作土・砂礫層・水田耕作土層と26.90m前後まで続く。II - 2層からは、中世に降る可能性の高い、土師器細片が出土している。26.90m前後以下は、やはり流水性の堆積となり、SR-601としたが、SR-101・SR-401・SR-501と一連の流路で、下部にはラミナの発達した砂礫層がみられる。SR-501同様に、北側で約26.60m、南側で約26.40mと、南下がりの流路の底面が出土した。底面はIV層。SR-501からは、器表面が磨滅した弥生土器が出土している。

#### (7) VII区（図42、写真130・131）

VII区は、北棟北側の耐震補強基礎に関わる調査区のうち、建物中央部分の南北幅約2.5m、東西長約21.5mである。仮原点から23m以西で5mごとに区割を行い、東からVII A～VII E区とした。

重機掘削によりI層とII - 1層を取り除いたが、I・IV区同様、建物余掘りは柱基礎部分のみで、地中梁以下に埋蔵文化財の残存することを確認できた。調査区北辺に管路が埋設されており、VII区での土層観察・記録は、柱基礎間の地中梁以下の断続的なものである。これは後述するVIII区も同様である。

II - 1層下、標高27.20～27.30mの間に、中世に遡る水田関連土層のII - 2層が出土する。II - 2層は厚さ35cm前後を測り、水田層3枚と、間に砂礫層を認めたが、

畦畔や溝は検出できなかった。II - 2層最上部の砂礫層からは、口縁端部に接して断面三角形の突帯を貼り付ける土師質土器羽釜片が出土し、以下の耕作土からは中世の土師器や瓦器・白磁の細片が出土している。なお、建物を挟んだ西側I区II - 2層との対応は、現時点で明確でない。

II - 2層を掘り下げたところで工事掘削深度に達したが、以下の状況確認のため、各柱基礎間の深掘りを行った（写真131）。II - 2層以下は、砂質土や砂層・砂礫層が互層に堆積する流水性の堆積で、SR-701とした。I区SR-101、IV区SR-401等と一連の流路と推定される。約100cmの厚さ堆積し、東端のVII A区で底面が一段深く標高25.50m、IV C区で最も高く26.00m、西端V E区で下がって26.70mとなる。出土遺物には、弥生土器から古代の土師器・須恵器がある（写真130）。

#### (8) VIII区（図42、写真131）

VIII区は、北棟北側の耐震補強基礎に関わる調査区のうち、建物西側部分の南北幅約2.5m、東西長約17mである。仮原点から48m以西で5m毎に区割を行い、東からVIII A～VIII D区とした。

重機掘削後、II - 1層下で中世以前に遡るII - 2層が出土する。検出高は26.90～27.00mと西側に低い。東端VII A区で厚さ60cm前後ありながら、VII C区では以下のSR-806の堆積が高まり、厚さ約10cmと薄い。それが西端のVIII D区では厚さ50cmを超える。そして、VII C・D区のII - 2層最上部では、砂質土で埋まる南北方向の浅い溝SD-801～805を確認した。出土遺物には中世の土師器や瓦器の小片がある。II - 2層からも、中世の土師器や瓦器、青磁の小片が出土している。

上述したように、起伏が激しいものの、II - 2層下では砂層・砂礫層が互層状に堆積する流路内堆積となり、SR-806と一緒にした。柱基礎間の深掘りによれば、VII A～VII C区では底面となるIV層上面を、27.70～25.50mと、西下がりに確認している。ただし、最西部のVIII D区では25.40mまで掘り下げたものの、底面に達していない。VII C区を境に流路内堆積に相違があり、SR-806と一緒にした中に、複数単位の重複がある可能性もある。SR-806として取り上げた遺物には、弥生時代以降、古代におよぶ遺物がみられるとともに、瓦器片も混じる。

#### (9) IX区（図42、写真132）

IX区は西棟西側の調査区で、東西幅約2.8m、南北

長約22.5mを測る。仮原点から西に72m、南に10m以南を5m毎に区割を行い、北からIX A～IX Eとした。

重機掘削によりI層とII-1層を取り除いたが、これまでの建物跡調査区と異なり、建物自体が後の増築工事によるため、柱基礎が深く大きく、地中梁も柱基礎部分まで及ぶ。また、調査区南半では管路の埋設が西半に及び、埋蔵文化財の残存範囲は東西に幅が狭く、土層の観察は布掘り状の建物余掘り西壁で行った。

II-1層下、標高27.00m以下にはII-2層が広がる。覆土となる砂層・砂礫層を挟みながら、2枚の水田層を認めることができ、II-2層の厚さは最大70cmにおよぶ。しかし、II-2層は全体に北へ傾斜した堆積となり、上部の水田層はIX D区北端まで、下部の水田層でもIX E区中央部までしか広がらない。狭い残存範囲で水田耕作土に伴う溝や畦畔は確認できなかった。出土遺物には、中世の土師器や瓦器の細片がある。

II-2層下、IX E区から北ではIV層が落ち込み、砂層・砂礫層からなる流路内堆積となり、SR-901とした。工事掘削深度である26.00m前後まで掘り下げたが、範囲内で流路底には到達しなかった。遺物は弥生土器以下、回転ヘラ切り痕を残す円盤状高台の土師器壺など、古代までの遺物が含まれる。

IV層が高まりを形成する調査区南端部では、IV層上に、焼土や炭屑の混じる堆積が認められ、上部を削平された竪穴式住居の火床とみられる。狭い範囲であるが、SF-903、SC-904、SC-905の単位を読み取った。出土遺物は弥生土器片のみだが、古墳時代以降に降る可能性もある。

以下のIV層も工事深度まで掘り下げたが、遺物の出土ではなく、IV層の高まり中央部で、以下のV層も高まりを形成している。

#### (10) IX区(図43、写真133)

IX区は東棟内部に位置する。前述したように調査開始後に建物内部床下にも埋蔵文化財が良好に残存していると判明したため、調査開始後に調査対象として追加した調査区である。建物北東隅の仮原点から南約35mに位置し、南北幅は建物1スパン分の約4m、東西長約14mである。調査区北西部はI区南端に接する位置である。

建物外部東側でやや高く標高約28.00mまで、内部では27.60m、建物西側では約27.50mまで擾乱がおよび、II層が残るのは建物東側のみである。それもII-1層で、直下ではラミナの発達した砂層・砂礫層とな

り、SR-1001とした。調査区北壁際の一部でIV層の高まりが残り、流路の北岸の一部である。最下部には多くの遺物を含んだ砂礫層があり、深さは東壁で100cm前後、西壁で約90cmを測り、わずかながら西側が低い。また底面の南側大半は、塊石を多く含むIV層あるいはV層である。

SR-1001出土遺物には須恵器がまったくみられない。東部に偏った上部の砂礫層からは布留系甕の口縁部が出土し、西壁際の最下部砂礫層上の微細砂層からは、古墳前期初頭に降る、内外面に赤彩を施した高杯が出土した。最終埋没は古墳前期初頭から前業とみられ、後者の出土層は、I区SR-122の一部に近似する。一方、最下部の砂礫層からは多量の弥生土器が出土しており、弥生中期末～後期前業の土器が主体を占める。なお、前期に遡る土器片も散見された。

### 3 まとめ

今回の調査は、共通教育北棟を中心に、各所に総延長180mにも及ぶ調査区を設定することとなり、周辺地形と遺跡変遷の概要を確認することができた。

まず、中世以前には流路を形成し、埋没した後に水田関連土層であるII-2層の堆積が広がる窪地が、共通教育管理棟北中庭の北半以北に広がることが明らかとなった。東から、IV区南北辺北で南岸が出土し、建物を挟んだI C区・II区西壁に続く。さらに西のIII区はII-2層が広がり窪地内に収まるが、建物西側のIX E区でIV層が高まる南岸を認めることができた。北岸についても、共通教育管理棟北側のV～VII区内では出土しなかったものの、V・VI区で北側に上昇する流路の底面を確認しており、そう遠くはない位置に想定できることになる。一方、限られた調査範囲と断続的となりざるを得なかつた土層観察により、水田関連遺構の確認は十分果たせなかつたが、およそ11世紀から14世紀におよぶ出土遺物から、西側の文京遺跡18次調査・25次調査で出土した水田遺構と一連の可能性が想定できる。詳細な土層対応と遺物の検討を経て、今後判断したい。

これら水田層・流路の他は、その南側IV層上面で若干の遺構が出土した。IX区西端ではきわめて断片的ではあるが、住居跡火床が確認できた。一方、東側では、IV区東西辺北東端でのSR-403、IV区東西辺南の西半でSD-402が、IX区ではSR-1001、そしてI区南端でSD-124、SX-120、SR-122が認められた。このうち、

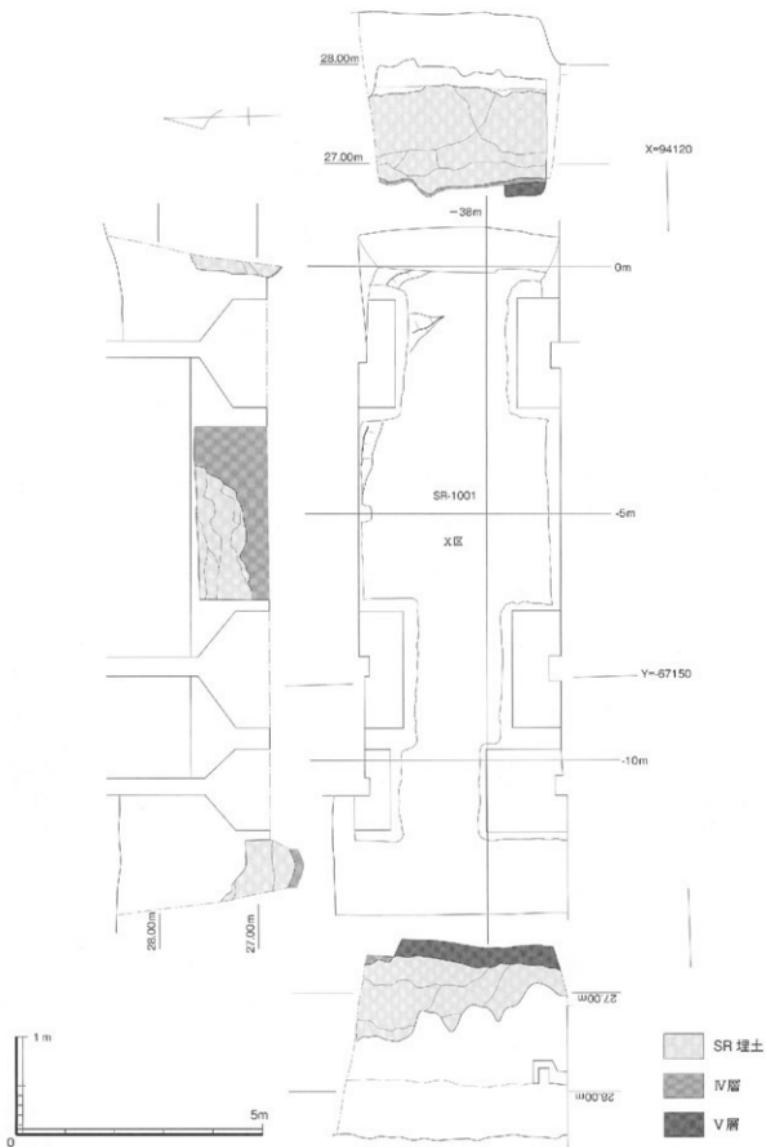


図43 00712調査X区平面図及び土層断面図（縮尺 1/100、1/50）



写真117 00712調査 I 区 II -2- ②水田層畦畔(東から)



写真118 00712調査 I 区 東辺造構検出状況(南から)

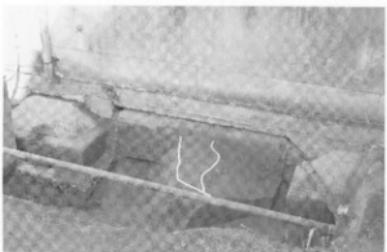


写真119 00712調査 I 区 SX-120周辺(西から)

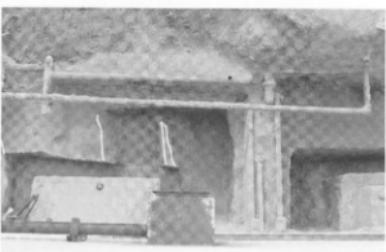


写真120 00712調査 I 区 SD-124、SR-101(東から)



写真121 00712調査 II 区全景(北から)



写真122 00702調査 III 区全景(東から)

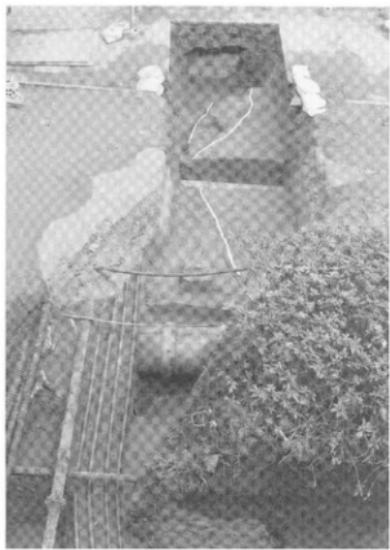


写真123 00712調査IV区東西辺北IV層上面状況(西から)



写真124 00712調査IV区東西辺南IV層上面状況(南西から)



写真125 00712調査IV区南辺発掘状況(北から)



写真126 00712調査IV区南北辺SR-401(北から)



写真127 00712調査IV区東西辺 SD-402(南西から)



写真128 00712調査V区完掘状況(北西から)



写真129 00712調査VI区完掘状況(北西から)



写真130 00712調査VII B区深掘り部分土層断面(北から)

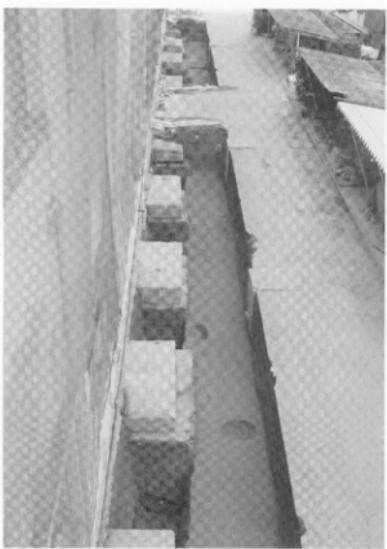


写真131 00712調査VII・VIII区完掘状況(東から)



写真132 00712調査IX区完掘状況(南から)



写真133 00712調査X区西半部完掘状況(東から)

SR-403とSD-402は出土遺物から水田耕作に関わる可能性が高く、出土遺物はないが、位置からしてSD-124も同様とみられる。ところが、SR-1001は最終埋没が古墳時代に降るもの、むしろ弥生時代中期から後期にかけて流路として機能していたらしい。SX-120・SR-122もSR-1001と関係する可能性が高い。これまで周辺で同時期の流路・遺構は確認されておらず

す、今後文京遺跡の変遷を考える上で重要な位置を占めることになろう。

IV層中の绳文時代遺跡については、IV区東西片北で一部土壤化した土層を確認したものの、この土層を含めて、明らかなIV層出土遺物は確認できなかった。

(吉田)

## 00713 (樽味団地) 農学部制御化農業実験実習棟外上水道引込工事 に伴う試掘調査

調査地点	松山市樽味3丁目5番7号
	愛媛大学樽味団地構内
調査面積	0.6m <sup>2</sup>
調査期間	2007年11月2日
調査種別	試掘調査
調査担当	田崎博之
調査補助	宮崎直栄・浜田美加
依頼文書	農学部学部長発事務連絡 (平成19年9月18日付)

### 1 調査にいたる経緯

農学部から、樽味団地の制御化農業実験実習棟への上水道引込工事を行う計画がある旨の連絡があった。埋蔵文化財調査室では、農学部と協議を行い、土木工事範囲の埋蔵文化財の状況を確認するため、試掘調査を実施することとした。

### 2 調査の記録

今回の上水道の引込は、樽味団地の中央西側の農業工学実験室から三科実験室の北側と西側を通り、制御化農業実験実習棟へいたる経路で、現在の地表面から30cmを掘削する計画である。これまで農業工学実験室と三科実験室周辺では、樽味遺跡7次調査(調査番号:00201)IV・V区の調査成果がある。とくに、IV区では、現地表下70cmで団地造成以前の水田層(樽味団地全域での基本層序II層)、140cmで弥生時代～中世の遺物を包含する基本層序III層、さらに下層ではIV層を削り込む古墳時代後期と古代末～中世の2条の自然流路が確認されている。

ところが、制御化農業実験実習棟周辺での調査はなく、さらに農業工学実験室と三科実験室の南側にはI

mほどの段差がある。そのため、制御化農業実験実習棟周辺では35cmほどでIII層があらわれる可能性を考え、制御化農業実験実習棟の西側にトレンチを設定することとした(図44)。

調査では、重機で造成土を慎重に掘り下げていったが、地表下81cmまで樽味団地が造成された際の客土である表土層(I層)がつづく(図45、写真135)。その下層で団地造成以前の水田層があらわれた。この水田層は、厚さ30cmほどで、上部はオリーブ黒色の砂礫混じりのシルト質土の耕作土層(II-1層)、下部は褐色シルト質土に明黄褐色粘質シルト土の塊が混じる整地層(II-2層)である。さらに、地表下113cmで、明黄褐色の砂礫混じりのシルト層があらわれた。樽味団地全域での基本層序IV層にあたる。拳大の礫が混じり、IV層でも下部にあたる特徴を持つ。

### 3 調査のまとめ

今回の調査では、上水道引込工事に伴って埋蔵文化財への影響が予想された制御化農業実験実習棟周辺で調査を実施した。以上の調査成果を樽味遺跡7次調査IV区と比較すると、制御化農業実験実習棟周辺は、団地造成以前から、北側の農業工学実験室と三科実験室周辺よりも50cmほど低くなった地形であったことがわかる(図45)。

また、樽味遺跡7次調査IV区の古代末～中世の自然流路SR-102最上面は、今回の調査のIV層の検出高よりも高いこと、今回の調査ではIV層でも下半部にあたる堆積土層が確認されたことから、団地造成以前のII層水田層が開田された際に、現在の制御化農業実験実習棟周辺は50cmほど削平を受けていると考えられる。ただし、削平が南側にどれだけおよぶかは明らか

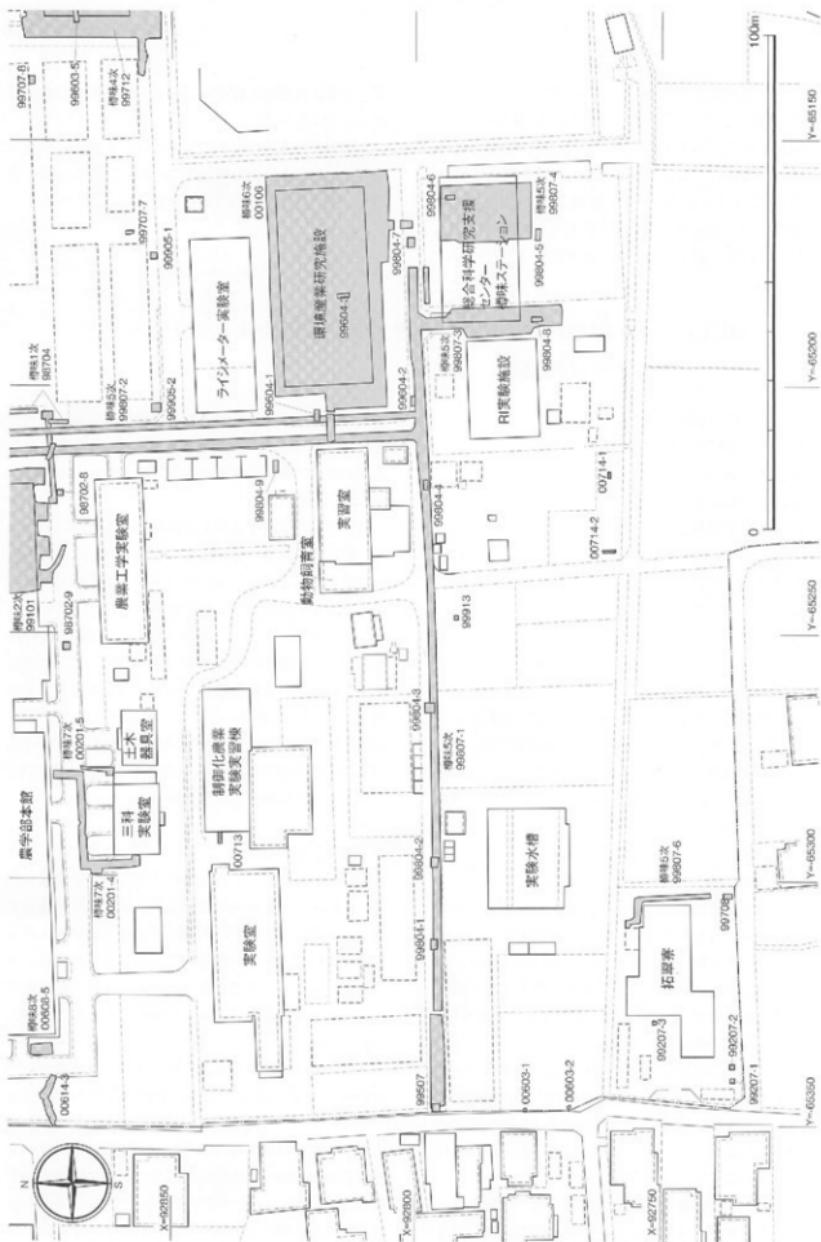


図44 00713-00714調査地点配置図（縮尺 1/1,000）



写真134 00713調査地点（北西から）



写真135 00713調査土層断面（北西から）

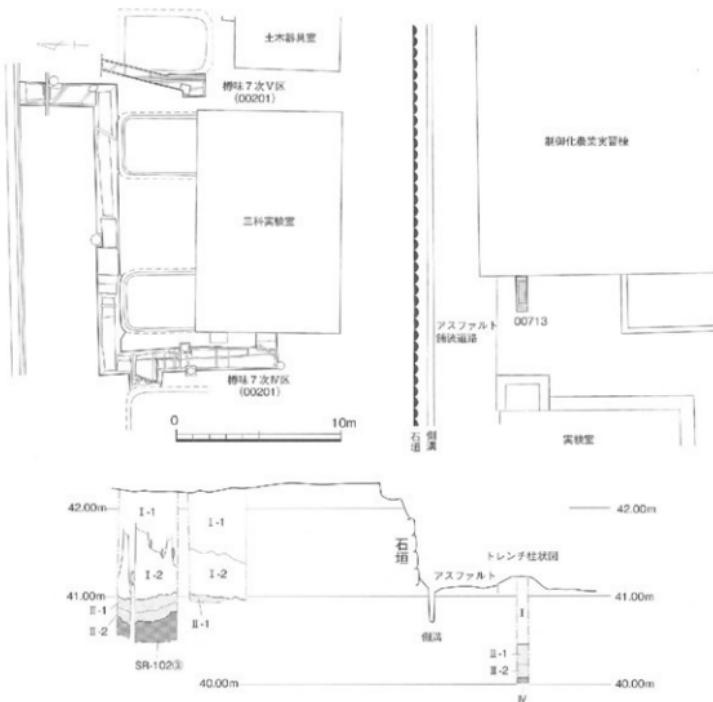


図45 00713調査、樽味7次IV・V区位置図及び土層断面図（縮尺1/300、1/100）

でない。今後も周辺で土木工事を行う場合には試掘調

査が必要である。

(田崎)

## 00714 (樽味団地) 農学部育成ハウス設置工事に伴う立会調査

調査地点 松山市樽味3丁目5番7号  
愛媛大学樽味団地構内  
調査面積 2.1m<sup>2</sup>  
調査期間 2007年11月2日  
調査種別 立会調査  
調査担当 田崎博之  
調査補助 宮崎直栄・濱田美加  
依頼文書 農学部学部長発事務連絡  
(平成19年9月18日付)

状況の確認を行った(写真136~138)。

### 2 調査の記録

工事立会では、育成ハウスを設置するための客土作業に伴う掘削工事で埋蔵文化財に影響が生じていないことを確認した。また、樽味団地南西部の埋蔵文化財の分布状況を確認するために、今回の工事範囲内の2ヶ所にトレンチを設定した(図44・46)。

#### (1) 1トレンチ(図46、写真139・140)

1トレンチは育成ハウス設置工事範囲の南東角付近に位置する。場耕作土にあたるI層を掘り下げるとき、現地表下45cmで樽味団地における基本層序IV層にあたるにぶい黄褐色シルト層があらわされた。調査範囲が狭いこともあり、遺構・遺物は出土していない。

#### (2) 2トレンチ(図46、写真141)

2トレンチは育成ハウス設置工事範囲の南西角付近に位置する。現地表下60cmまでは場耕作土にあたるI層がつく。その直下で、樽味団地における基本層序IV層にあたるにぶい黄褐色シルト層があらわされた。調査範囲が狭いこともあり、遺構・遺物は出土していない。

### 3まとめ

今回は、樽味団地南西部の実習は場で、工事立会とともに確認調査を行った。北に隣接する樽味遺跡5次調査I区では、古墳後期～中世の自然流路・堅穴式住居跡・土塙などが出土している。とくに、自然流路

#### 1 調査にいたる経緯

農学部事務局から、樽味団地南西部の実習は場に育成ハウスを設置する計画があることが連絡された。周辺では、樽味遺跡5次調査I区で現地表面から70cm、北西部では60cmで、古代～中世の遺構が出土している。西側水田で実施した確認調査(調査番号:99913)では、地表下50cmで樽味団地全城の基本層序IV層が確認されている。そこで、農学部事務局との協議を進め、埋蔵文化財保護のため20～80cmの盛土を行った上で育成ハウスの基礎工事を行う工事計画に変更することとなった。

こうした協議結果を確認した上で、10月11日に土木工事届けを松山市教育委員会へ提出した。これに対して、10月24日、松山市教育委員会から施工にあたり工事立会の通知があった。埋蔵文化財調査室では、これまで樽味団地南西部の埋蔵文化財の分布状況を把握していないことから、工事立会とともに埋蔵文化財の分布



写真136 00714調査地点遠景 (南西から)



写真137 00714調査地点全景 (北東から)

SR-1は、樽味団地南西部を東西に流れるものと推定されるが、今回の調査で樽味団地の基本層序Ⅳ層を現地表下45~60cmで確認できたことから、北西・南東

に蛇行しながらのびることが考えられる(図46)。当然、SR-1の南側にも、遺構が営まれている可能性が残されている。  
(田崎)

## 00715 (御幸団地) 2007年度構内遺跡確認調査

調査地点	松山市御幸2丁目3番15号 愛媛大学御幸団地 (学生寄宿舎 御幸寮)
調査面積	12.5m <sup>2</sup>
調査期間	2007年12月17日
調査種別	確認調査
調査担当	田崎博之
調査補助	宮崎直栄・濱田美加

### 1 調査にいたる経緯

2007年12月6日、施設基盤部から来年度以降の御幸団地についての整備計画が報告された。御幸団地には学生寄宿舎があり、整備計画では、中庭での建物新営工事、男子寮と女子寮の改修工事、寄宿舎管理棟の建て替え工事など、団地全域におよぶ建物新営や改修工事が予定されている。これまで、埋蔵文化財調査室では、御幸団地西辺の外灯設置工事に伴う00008調査、防犯ネット設置に伴う00405調査を行い、中世段階と推定される水田層を確認している。しかし、既往の調査データでは精度が高い埋蔵文化財の分布状況を十分把握しているとは言い難く、御幸寮整備に伴って埋蔵文化財にどのような影響が生じるか判断できない状況であった。そこで、2007年度の確認調査として、発掘調査を実施することとした。

### 2 調査の記録

今回の調査では、整備計画の内容を考慮して、1~7トレンチを設定して調査を進めることとした。1・2トレンチは女子寮建物の改修工事、3・5・6トレンチは中庭での建物新営と寄宿舎管理棟の建て替え工事、4トレンチは男子寮建物の改修工事、7トレンチは御幸団地西辺のブロック塀の改修工事に対応し、建物余掘りや埋蔵文化財の深度を確認するための調査トレンチである(図47、写真142・143)。また、既往の調査成果も再検討し、以下の基本層序を設定した。

I層：造成土である表土層。

II層：御幸団地が造成される以前の水田層と、洪水

によって堆積した砂礫層。下層には旧河道が埋没する。

III層：微高地の黒褐色～暗褐色のシルト質土層で、御幸団地南東部だけに分布する。

IV層：微高地のにぶい黄褐色シルト層。III層と同じく、御幸団地南東部だけに分布する。

以上の基本層序に沿ながら、各トレンチの調査結果を報告する。

#### (1) 1トレンチ(写真144)

1トレンチは、御幸団地南半部の女子寮建物の北側に設定した。ところが、造成土である表土層のI層を掘り下げると、トレンチ南半部では東西方向にのびる配管、北半部では貯水槽と考えられるコンクリート基礎があらわれた。そのコンクリート基礎の余掘り範囲内に1トレンチが収まることを確認できたため、1トレンチの調査を打ち切った。

#### (2) 2トレンチ(図48-①、写真145~147)

前述したように1トレンチでは女子寮建物の余掘り範囲の確認ができなかったので、東側へ35m離れた位置に2トレンチを設定した。表土のI層を掘り下げると、現地表下約50cmで、御幸団地が造成される以前の水田層であるII層があらわれ、トレンチ南端では建物余掘り部分を確認できた。確認できた余掘りの掘り形はL字形にカーブしており、建物の柱基礎部分だけを幅2~2.3mほど「コ」字形に拡張していると考えられる。柱周辺での余掘り範囲は壁面から1.4m前後で、以外ではコンクリート犬走り部分に収まるものと判断した。

I層下で確認したII層は、層厚50cmほどを測り、II-1~II-3層に分層できる。II-1層は御幸団地が造成される直前の水田層である。小穂混じりのオリーブ褐色シルト質粘質土層で、マンガンの集積層が縞状に何枚もみられ、数枚の水田層が累積していると考えられる。II-2層は、厚さ4~6cmのオリーブ褐色砂礫層である。小穂や粗砂からなり、細砂・粗砂のラミナが発達する。洪水氾濫による河川堆積物である。II-

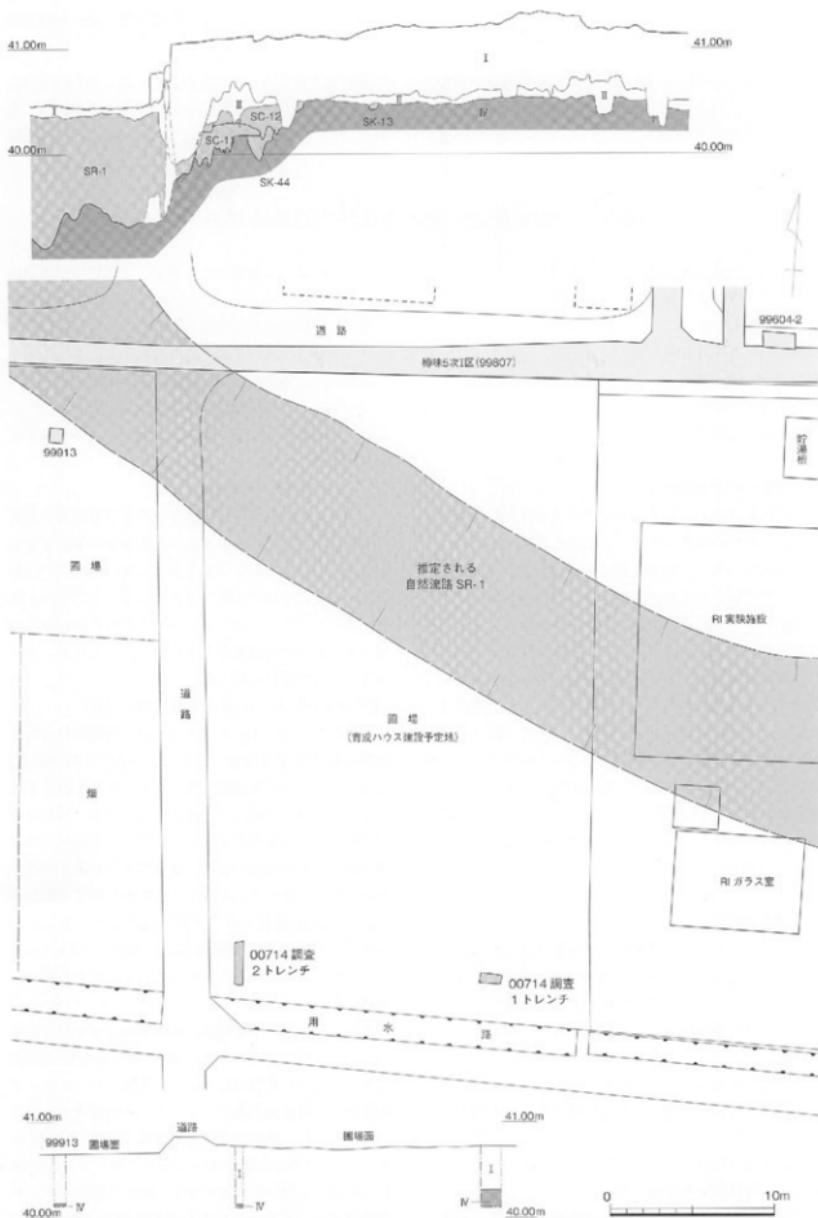


図46 00714調査地点位置図及び土層断面図（縮尺 1/300、1/50）



写真138 00714調査地点西辺の掘削状況（南から）



写真139 00714調査1 トレンチ（南西から）

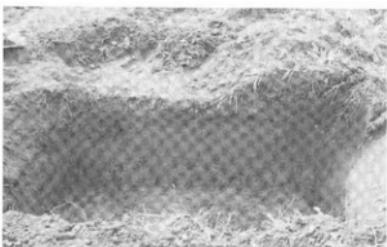


写真140 00714調査1 トレンチ土層断面（西から）

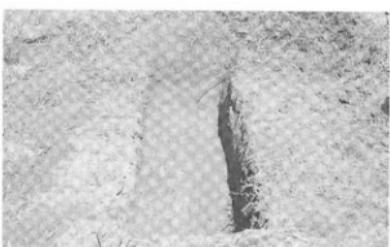


写真141 00714調査2 トレンチ（南から）

3層はにぶい黄褐色～褐色の粗砂混じりシルト質土層である。炭化物片が多く混じる。土壤化が進み、上半部を中心として攪拌された痕跡を確認できたので、水田層と判断した。上半部のⅡ-3-①層は耕作土層、下半部のⅡ-3-②層はマンガンが集積することから床土層と考えた。

さらに、現地表下120cmでは、暗褐色砂質シルト質土層があらわれ、Ⅲ層とした。粗砂・中砂が混じり、土壤化も進んでいる。遺物は出土していないが、土質的には文京遺跡などの弥生時代以降の土壤化層と共通する。Ⅲ層は厚さ15～25cmを測り、その下層ではにぶい黄褐色の粘質シルト層があらわれた。砂礫はほとんど含まれていない。土色はやや淡いが、文京遺跡北西部の基本層序Ⅳ層の特徴に近い。以上のⅢ・Ⅳ層を確認できたことから、2トレンチ周辺には微高地が広がっているものと考えられる。

### (3) 3トレンチ（図48-②、写真148・149）

3トレンチは御幸寮西半部の寄宿舎管理棟の東側に設定した。建物壁から1.6m幅のコンクリート犬走り部分があり、さらに東へ42mまでの範囲には多数の

配管が埋設されており、建物の余掘り範囲は確認できなかった。ただし、建物壁から5.85～7.6mのトレンチ東端で土層の堆積状況を確認できた。表土のⅠ層を掘り下げると、現地表下70～152cmまでⅡ層がつづく。Ⅱ層の中位～上部には1トレンチと共に通るⅡ-1層とⅡ-2層が堆積するが、下部では1トレンチではみられなかったⅡ-4層があらわれた。1トレンチのⅡ-3層は、2トレンチではみられない。

Ⅱ-1層は、最上部の砂質土層、中位～下部の厚さ50cmほどの水田層から構成される。上部をⅡ-1-①層、下部をⅡ-1-②層とした。Ⅱ-1-①層は、1トレンチではみられなかった上層で、径2～5mmの小角礫が多く混じるオリーブ褐色砂質土層である。Ⅱ-1-②層は、1トレンチで確認した御幸団地が造成される直前の水田層であるⅡ-1層と対応し、小礫混じりのオリーブ褐色シルト質粘質土層で、マンガンの集積層が竪状に何枚もみられ、数枚の水田層が累積していると考えられる。Ⅱ-2層も、1トレンチのⅡ-2層と対応する。オリーブ褐色砂礫層である。小礫や粗砂からなり、細砂・粗砂のラミナが発達する。Ⅱ-4層は、粗砂・細

砂からなる暗灰色砂礫層で、小砾・シルトが混じる。やや土壤化した土層であり、攪拌されたような痕跡もあり、II層の範疇で捉えた。畠耕作土の可能性も考えられる。

II層の下層では、現地表下152cmで、ラミナが発達する河川堆積物を確認した。自然流路SR-1とした。SR-1-①～③層に分層できる。SR-1-①層は灰色微細砂と暗灰色細砂がラミナで互層堆積する。SR-1-②層は、灰色の粗砂・細砂のラミナが堆積する。SR-1-③層は、灰色及び暗灰色の細砂が縞状に互層堆積する。

#### (4) 4トレンチ (図48-③、写真150～152)

4トレンチは男子寮遺物の南側に設定した。表土のI層を掘り下げるに、現地表下約85cmでII層があらわれ、トレンチ北半部の建物壁から2.15mで余掘りの肩部を確認した。ただし、男子寮建物南側のコンクリート走り部分に接して設定された00405調査1～6トレンチではII層が確認されており、建物の柱基礎部分だけを「コ」字形に拡張した余掘りを推定できる。

II層は、御幸寮造成直前の水田層であるII-1層、その下層の砂礫層のII-2層、3トレンチでも確認できたやや土壤化したオリーブ褐色砂礫層であるII-4層から構成される。II-1層では、下半部の5～10cmにマンガンが集積する。II層の下層では、暗褐色土層があらわれた。土質は2トレンチのIII層と共通するが、砂礫が非常に多く混じり、III層の2次堆積と考えられる。層厚は10～15cmで、北に向かってわずかに傾斜しながら堆積する。III層下では、径4～5cmの円礫を主体とする灰色砂礫層があらわれた。ラミナが発達しており、3トレンチで確認したSR-1を埋める河川堆積物である。

4トレンチでは排土中から中世～近世の土器器皿を探取した。

#### (5) 5トレンチ (図48-④、写真153・154)

5トレンチは御幸寮中庭のほぼ中央に位置する。表土のI層を掘り下げ、現地表下85cmでII層があらわれた。層厚は約50cmで、4トレンチと同じく、II-1・II-2・II-4層から構成され、II-3層はみられない。II-1層は御幸寮造成直前の水田層。II-1層の下半部10～15cmにはマンガンが集積する。II-2層は2～4トレンチでも確認できたII-1層直下の砂礫層。II-4層はやや土壤化したオリーブ褐色砂礫層である。II層の下層では、ラミナが発達する砂礫層があらわれた。

3・4トレンチでも確認したSR-1を埋める河川堆積

物である。5トレンチでは、SR-1は、SR-1-①～②層で構成されている。SR-1-①層は細砂とシルトが縞状に互層堆積する灰色の砂層である。SR-1-②層は小砾と粗砂からなる灰色の砂礫層である。

#### (6) 6トレンチ (図48-⑤、写真155・156)

6トレンチは御幸寮中庭の東端に東西方向に設定したトレンチである。現地表下70～75cmまで表土のI層がつづき、その下層でII層があらわれた。II層は、2～5トレンチでも確認されているII-1層とII-2層からなる。II-1層では中位と下底部でマンガンの集積層が縞状にみられるので、2層の水田層を考えることができる。また、トレンチ東端でII-1層に伴う水路を断面で確認できた。II-1層下には厚さ5cmほどのII-2層の砂礫層があらわれたが、面上に広がるのでではなく、部分的な堆積である。II-2層の下層にはラミナが発達する河川堆積物があらわれた。3～5トレンチでも確認されているSR-1を埋める堆積物である。6トレンチではSR-1-①～④層に分層できる。SR-1-①層は小砾が混じる細砂・粗砂を主体とする灰色砂礫層。SR-1-②層は粗砂・小砾からなる灰色砂礫層。SR-1-③層は青灰色粘土層。SR-1-④層は褐色微細砂層である。

6トレンチでは、II-2層もしくはSR-1から、中世の土器器土鍋と考えられる胴部破片が出土している。

#### (7) 7トレンチ (図48-⑥、写真157)

7トレンチは御幸寮地北東角の敷地を画するブロック塀に接して南北方向に設定したトレンチである。表土のI層を掘り下げるに、現地表下70～80cmでII層があらわれた。7トレンチのII層はシルト混じりの砂礫質土で、他のトレンチでみられた水田層であるII-1層と異なる。土壤化してもおり、明確な攪拌痕跡も観察できる。土質的には、3～6トレンチで確認されたII-4層にもっとも近いので、その範疇で捉えるとした。II-4層の下層では、ラミナが発達する河川堆積物があらわれ、他のトレンチでも確認されているSR-1と考えた。7トレンチではSR-1-①～②層に分層できる。SR-1-①層は、暗灰色の粗砂・小砾からなる砂礫層で、シルトや微細砂のラミナがほぼ水平にみられる。SR-1-②層は、シルト混じりの粗砂を主体とする褐色砂層である。

### 3 調査の成果

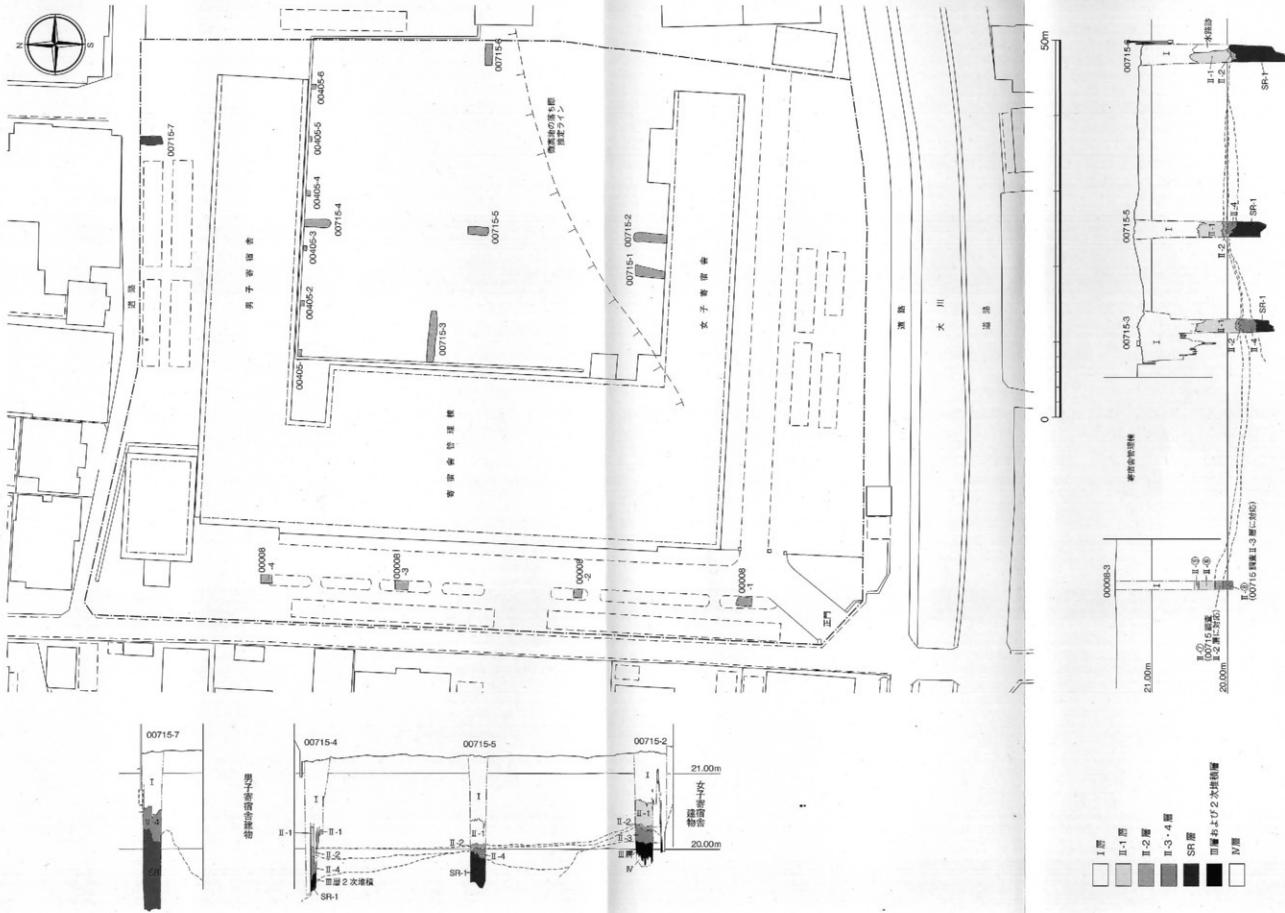


図47 00715調査地点位置図及び層辺土層断面図（縮尺1/500、1/50）

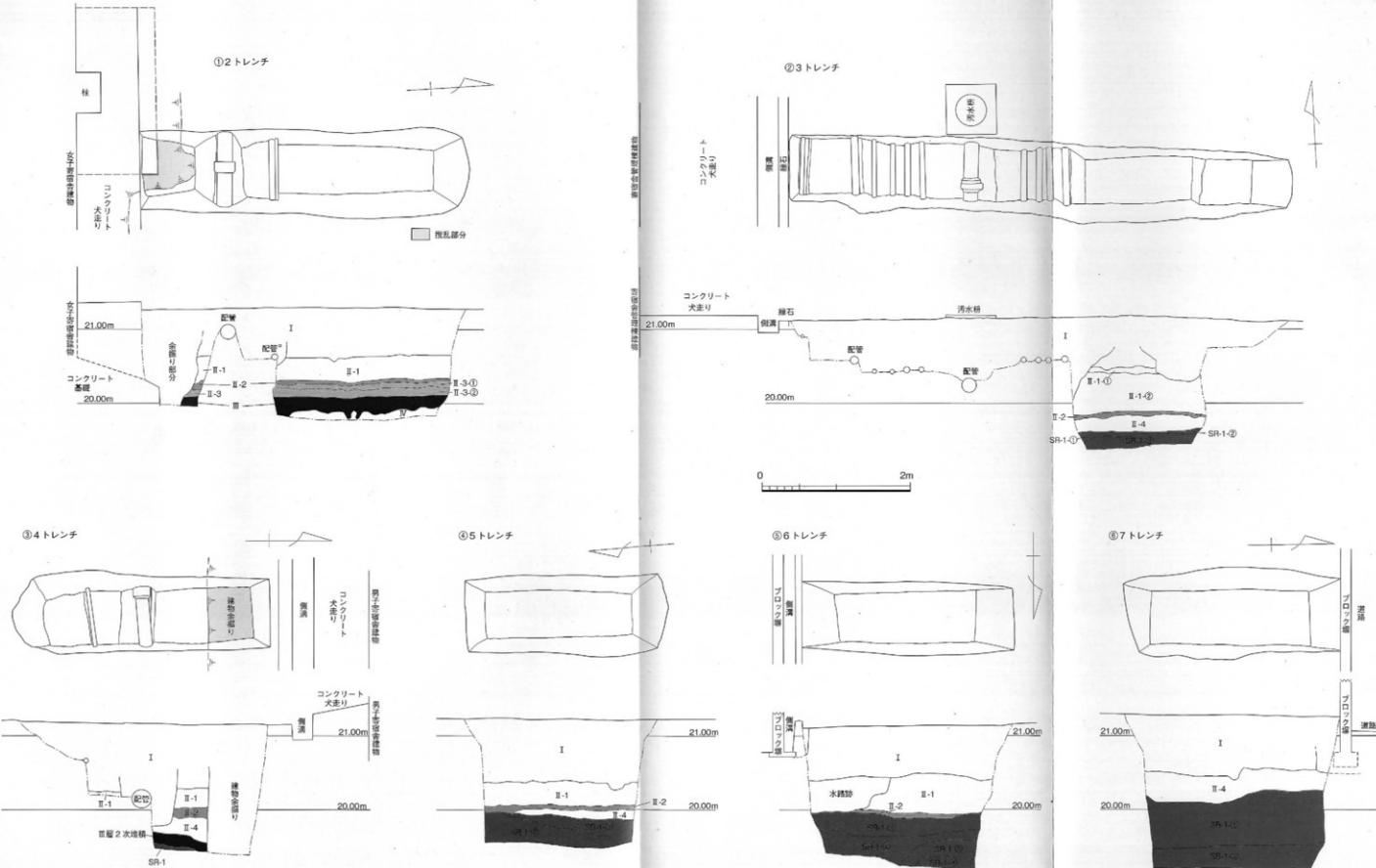


図48 00715調査2～7トレンチ実測図（縮尺 1/50）



写真142 00715調査1・2・5・6トレンチ（北西から）



写真143 00715調査1・2・5・6トレンチ（北から）



写真144 00715調査1トレンチ全景（北東から）



写真145 00715調査2トレンチ全景（北から）



写真146 00715調査2トレンチ南端西壁土層断面



写真147 00715調査2トレンチ中央～北端西壁土層断面

今回の調査では、御幸寮の中庭を中心として調査トレンチを設定した。これまで実施してきた00008調査1～4トレンチや00405調査1～6トレンチの調査結果もあわせて、御幸団地の埋蔵文化財の分布状況を把握できた（図47）。

まず、造成土である表土層のI層下では、今回の調査1・7トレンチ以外では、すべてのトレンチで水田層（今回の調査のII-1層、以下同じ）を確認できた。遺物は出土していないが、層序的に言えば、御幸団地

造成直前までの水田層と言える。その下層には5～10cmの厚さの薄い砂礫層（II-2層）が堆積している。洪水氾濫によって運ばれた河川堆積物である。その直下には、今回調査の2トレンチでは水田層であるII-3層が確認できた。このII-3層と対応する土層は、00008調査でもII-④・⑥～⑧・⑩層として確認され、中世の三足付き土鍋の脚部破片や龍泉窯系青磁など13～14世紀の遺物が出土している。00405調査4トレンチでも、II-④層として確認されている。ただし、今

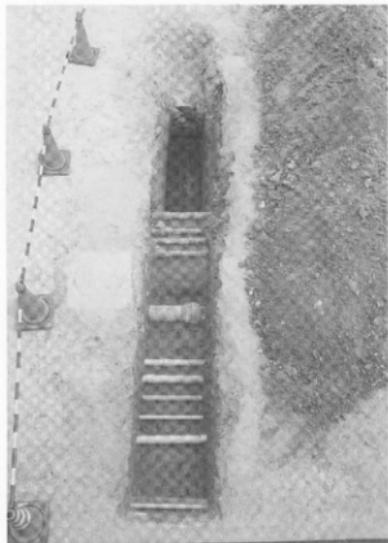


写真148 00705調査3 トレンチ全景（西から）

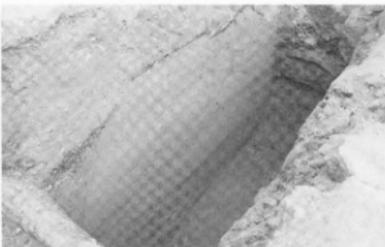


写真149 00715調査3 トレンチ東端北壁土層断面



写真150 00715調査4 トレンチ遠景（南西から）

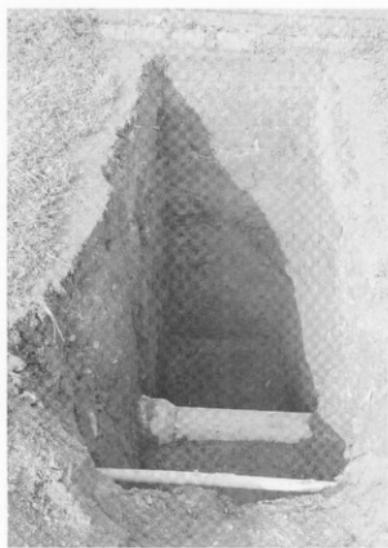


写真151 00715調査4 トレンチ全景（南から）



写真152 00715調査4 トレンチ北端西壁土層断面



写真153 00705調査5 トレンチ全景（北から）

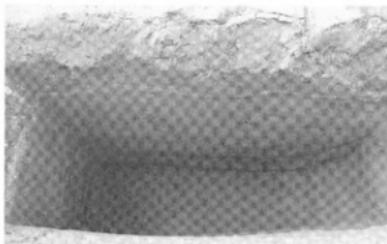


写真154 00715調査5 トレンチ西壁土層断面



写真155 00715調査6 トレンチ全景（南西から）

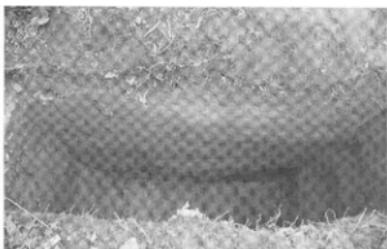


写真156 00715調査6 トレンチ南壁土層断面



写真157 00715調査7 トレンチ全景（南西から）

回調査の3～5・7トレンチでは、Ⅱ・3層はみられず、かわってⅡ・4層とした粗砂・細砂からなる暗灰色砂礫層が確認されている。ただし、Ⅱ・4層は小礫・シルトが混じり、やや土壤化した土層であり、攪拌されたような痕跡もみられるので畠耕作土の可能性が考えられる。したがって、中世には、水田と畠が混在しながら営まれる状況を推定できる。

こうしたⅡ層の下層では自然流路SR-1を確認できた。SR-1は、00008調査や00405調査では調査深度が浅いため確認までいたっていないが、御幸団地を南北・北東方向にながれる中世以前に埋没した自然流路と考えられる。

一方、今回調査の2トレンチで確認できたⅢ層とⅣ層は、扇状地上の微高地を構成する堆積土層である。今回は調査範囲が狭いこともあり、遺物は出土していないが、団地周辺の調査成果から、Ⅲ層には弥生時代～古墳時代、Ⅳ層には縄文時代の遺構・遺物が含まれている可能性が高い。

以上、御幸団地では、南東部に微高地、その北西側に自然流路SR-1が流れる景観を復元できる。微高地

上には縄文時代～古墳時代の遺構・遺物が含まれていると考えられる基本層序Ⅲ・Ⅳ層が分布する。また、自然流路SR-1は中世以前に埋没し、その窪地に水田と畠が混在しながら営まれているものと考えられる。

#### 4 埋蔵文化財の保護について

今回の確認調査の結果と既往の調査結果を総合することで、御幸団地における埋蔵文化財の分布状況をほぼ把握できた。1月20日付けで施設基盤部に以下の埋蔵文化財の保護に配慮した御幸寮の整備計画の立案を依頼した。

①中庭における建物新設工事：御幸寮中庭では、現地表下115～130cmで中世の水田・畠が出土する。そのため、工事に伴う掘削が現地表下130cm以上であれば、発掘調査が必要となる。

②女子寮建物の改修工事：女子寮建物周辺は微高地上有たり、中世の水田と縄文時代～古墳時代の遺構・遺物が含まれると考えられる基本層序Ⅲ・Ⅳ層が分布する。女子寮建物の余掘り範囲は、建物沿いのコンクリート走り部分（幅85cm）まで、柱基礎

部分だけを壁面から1.4m、幅2~2.3mほど「コ」字形に拡張されていると考えられる。

③男子寮建物の改修工事：男子寮建物周辺には中世の水田・畠が分布する。男子寮建物の余掘り範囲は、建物沿いのコンクリート犬走り部分（幅1.2m）までで、柱基礎部分だけを壁面から2.15mほど「コ」

字形に拡張していると考えられる。

④寄宿舎管理棟の建て替え工事：今回の調査では、寄宿舎管理棟の余掘り範囲は確認できなかった。しかし、寄宿舎管理棟周辺には中世の水田・畠が分布する。周辺の調査所見から掘削が現地表下120cmをこえる場合は発掘調査が必要である。  
(田崎)

---

## 愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

— 2007年度 —

愛媛大学埋蔵文化財調査報告 XIX

2009年2月10日

発行 愛媛大学埋蔵文化財調査室  
〒790-8577 松山市道後鍵又10-13  
TEL 089-927-9127

印刷 岡田印刷株式会社  
〒790-0012 松山市湊町7-1-8  
TEL 089-941-9111

---